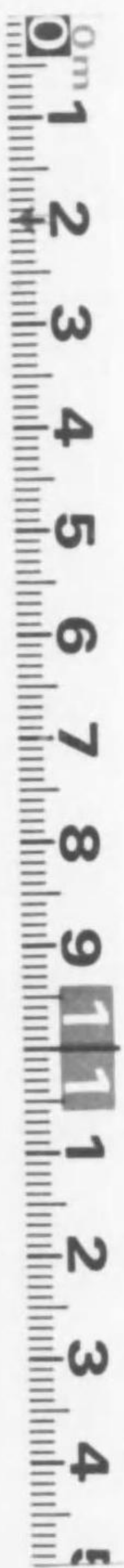


全
譯
芥
子
園
畫
傳

十二

301
40



始



全 譯

芥子園畫傳

第十二冊

翎毛花卉譜(上冊)

301
40

小杉放庵 註解
公田連太郎 譯文

東京アトリエ社刊行



芥子園畫傳



第十二冊

翎毛花卉譜(上冊)

翎毛花卉譜序

唐宋名手。凡善花卉。必兼禽鳥。宣和畫譜所載。統曰花鳥。得四十六人。若耑工草蟲。則附於蔬果內。按作圖。布置翎毛。多用木花。點綴草蟲。則用草花。蓋各以類從。茲譜故先草花草蟲。繼以木花翎毛。循序而進。非創也。試觀古人所稱。曰花木。曰蟲鳥。其爲先後。已肇於此矣。果之象形設色。等於衆花。朱櫻丹荔。珍貢內廷。青李來禽。名傳晉帖。自宜寫肖丹青。抗衡脂粉者。因草以及木。因花以及實。交有得焉。至於翎毛。爲類繁多。遠則巢居野處。泳浦眠沙。近則穿屋賀厦。喚晴噪雪。以尺幅中。皆截取花枝。未及全體。安置小鳥。以其所宜。若夫彩苞錦羽。丹頂華冠。只宜施於大幅。未可縮小失真。禽中庶類。何能盡悉。自須究心。夫學詩。尚曰多識於鳥獸。草木之名。卽學畫。亦不外乎是。

矣。因名以得其形與性。而古詩人之吟詠。豈不先於徐黃爲立粉本哉。

繡水王著題。辛巳八月望。男我來書於瞰浙樓中。

【譯】唐宋の名手、凡そ花卉を善くするは、必ず禽鳥を兼ぬ。宣和畫譜の載する所は、統べて花鳥と曰ひ、四十六人を得たり。若し崑山草蟲に工なれば、則ち蔬果の内に附く。作圖を按ずるに、翎毛を布置するには、多く木花を用ひ、草蟲を點綴するには、則ち草花を用ふ。蓋し各々類を以て従ふなり。茲の譜は故に草花草蟲を先にし、繼ぐに木花翎毛を以てし、序に循つて進む、創に非ざるなり。試に古人の稱する所を觀るに、花木と曰ひ、蟲鳥と曰ふ。其の先後たる、已に此に肇まる。果の象形設色は、衆花に等しく、朱櫻・丹雘は、珍として内廷に貢せられ、青李・來禽は、名、晉帖に傳はる。自ら宜しく丹青に寫肖し、脂粉に抗衡すべき者なり。草に因りて以て木に及び、花に因りて以て實に及び、交々得る有り。翎毛に至りては、類たること繁多なり。遠きは則ち集居野處し、浦に泳ぎ沙に眠る。近きは則ち屋を穿ち屢を賀し、晴に喚び雪に噪ぐ。尺幅の中、皆花枝を截取し、未だ全體に及ばざるを以て、小鳥を安置し、其の宜しき所を以てす。若し夫れ彩苞錦羽、丹頂華冠は、只だ宜しく大幅に施すべく、未だ縮小して眞を失ふ可からず。禽中の庶類、何ぞ能く盡く悉さん。自ら須く心を究むべし。夫れ詩を學ぶすら、尙ほ曰はく多く鳥獸草木の名を識ると。即ち畫を學ぶも亦、是

れに外ならず。名に因りて以て其形と性とを得。而して古の詩人の吟詠は、豈に徐黃に先だちて爲めに粉本を立つるにあらずや。繡水の王著、辛巳八月望、男我來、瞰浙樓中に書す。

【註】統曰花鳥、曰の字、原本誤つて白に作る。○創、創意、はじめの思ひつき。○朱櫻、櫻桃。○丹雘、燕雀。○内廷、宮中。○青李、青李。○來禽、林檎。晉の王羲之に來禽帖あり。○穿屋、詩召南行露篇に、誰謂雀無角、何以穿我屋とあるに本づく。○賀屢、淮南子に、大厦成りて燕雀相賀す、とあるに本づく。○彩苞錦羽、鳳凰孔雀などをいふ。○庶類、多くの類。○學詩、詩とは詩經をいふ。○多く鳥獸草木の名を識る、論語陽貨篇に出づ。孔子の語。○徐黃、徐熙と黃筌。○辛巳、康熙四十年。○望、十五日。

芥子園畫傳第十二冊翎毛花卉譜上册目錄

畫花卉淺說

畫法源流	二
畫枝法	二元
畫花法	三元
畫葉法	三元
畫帶法	三元
畫心蕊法	三元
畫根皮法	四元
畫枝訣	四元
畫花訣	四元
畫葉訣	四元

畫翎毛淺說

畫蕊帶訣	四元
畫法源流	四元
畫翎毛用筆次第法	五元
畫翎毛訣	五元
畫鳥全訣	五元
畫宿鳥訣	五元
畫鳥須分二種嘴尾長短訣	六元
木本五瓣花頭起手式	四則
桃花	六元

六瓣八九瓣花頭式 四則

杏花 杏
 梨花 杏
 金絲桃 杏
 玉蘭 杏

山茶 杏

茉莉 杏

梔子 杏

海棠 杏

碧桃 杏

千葉桃 杏

千葉石榴 杏

多瓣花頭式 四則

海棠 杏

碧桃 杏

千葉桃 杏

千葉石榴 杏

牡丹岐葉式 四則

花底 六

枝梢 六

嫩葉 六

根下 六

木本各花梗起手式 九則

柔枝交加 六

老枝交加 六

菊枝 六

臥幹橫枝 六

下垂折枝 六

牡丹根枝 六

橫枝上仰 六

刺花藤花式 四則

月季 七

薔薇 七

野薔薇 七

凌霄 七

牡丹大花頭式 三則

初開側面 七

全開正面 七

含苞將放 七

木本各花尖葉長葉起手式 五則

海棠 六

石榴 六

刺花毛葉式 三則

薔薇 六

月季 六

玫瑰 六

耐寒厚葉式 四則

桐子 六

山茶 六

桂葉 七

橙橘 七

點綴翎毛起手式 十二則

- 橫枝下垂 六七
- 藤枝 六七
- 嘴 六六
- 眼 六六
- 頭 六六
- 背 六六
- 肩 六六
- 翅 六八
- 肚 六九
- 尾 六九
- 足 六九
- 踏枝 六九
- 展立足 六九

踏枝式 五則

- 攀縮足 八九
- 正面上視不露足 九〇
- 昂首上視露足 九〇
- 側面下向 九〇
- 平立回頭 九一
- 側面上向 九一

飛立式 五則

- 舉翅搜翎 九三
- 下飛 九三
- 上飛 九三
- 俯首搜足 九二
- 斂翅將歇 九二

並聚式 四則

- 白頭借老 九四
- 和鳴 九四
- 燕爾同棲 九五
- 聚宿 九五

水禽式 四則

- 海鶴 九六
- 溪鷺 九六
- 汀雁 九七
- 沙鷗 九七

細鈎翎毛起手式 七則

- 畫嘴添眼 九八

翻身飛鬪二式 二則

- 畫肩脊半翅 九八
- 畫頭 九八
- 踏枝展拳各足 九八
- 畫全翅 九八
- 畫肚添足 九九
- 全身踏枝 九九
- 翻身倒垂 一〇〇
- 二雀飛鬪 一〇一

浴波式 二則

- 浮羽拂波 一〇一
- 垂翅待浴 一〇一

青在堂畫花卉翎毛淺說

畫法源流 木本花卉



宣和畫譜之著論也。謂花木具五行之精，得天地之氣，陰陽一虛而敷榮，一吸而斂，則葩華秀茂，見於百卉衆木者，不可勝計。其自形自色，雖造物未嘗用心，而粉飾大化，文明天下，亦所以觀衆目，協和氣焉。故詩人用寄比興，因以繪事自相表裡，雖纖枝小萼，以草卉稱妍，若全體大觀，則木花爲主。牡丹得其富麗，海棠得其妖嬈，梅得其清，杏得其盛，桃穠李素，山茶則豔奪，丹砂、月桂則香生金粟，以及楊柳梧桐之清高，喬松古柏之蒼勁，施之圖繪，俱足啓人逸致，奪造化而移精神。考厥繪事，唐之工花卉者，先以翎毛。肇端于薛稷，邊鸞至梁廣、于錫、刁光、周滉、郭乾暉、乾祐輩出，俱以花鳥著名。五代滕昌祐、鍾隱、黃筌父子，相繼而起。若昌祐、嵩心、筆墨不借師資，鍾隱師承郭氏弟兄，黃筌善集諸家之長，花師昌祐、鳥師刁光、龍鶴木石各有所本，而子居實、居采，復能紹其家法，是

以名重一時。法傳千古，信不虛也。故宋初之畫法，全以黃氏父子爲標準焉。至宋則徐熙特起，一變舊法。真前無古人，後無來者。雖在乎黃筌、趙昌之間，而神妙獨勝。其貽厥崇嗣，崇矩家學相承，真能繩其祖武矣。趙昌傳色極其精妙，不特取其形似，且能真傳其神。或謂徐熙與黃筌、趙昌相先後，然筌畫神而不妙，昌畫妙而不神。蓋謂是歟。故易元吉初工繪事，見昌畫，乃曰：世不乏人，要須擺脫舊習，超軼古人，方能極臻其妙。丘慶餘初師趙昌，晚年過之，直繼徐熙。崔白、崔慤與艾宣、丁昞、葛守昌、吳元瑜同召入畫院，名重一時。艾宣亦稱徐趙之亞。丁昞未足與黃徐並驅。葛守昌形似少精，整齊太簡，加之學力亦逮，駸駸以進。吳元瑜雖師崔白，能加己法，卽素爲院體之人，亦因元瑜革其故態，稍稍放逸，以寫胸臆。一洗時習，追踪前輩。蓋元瑜之力焉。劉常花鳥，米元章見之，以爲不減趙昌。樂士宣初學丹青，法愛艾宣，後乃悟宣之拘窘，獨能筆超前輩。花鳥得其生意，視宣淹淹如九泉下人。王曉師郭乾暉，法若未至。唐希雅及其孫忠祚所作花鳥，不特寫其形，而且兼得其性。劉永年、李正臣所作各畫，其態李仲宣花鳥頗佳，但欠風韻瀟灑。迨至南宋，雖時易地遷，而畫法又復一變。陳可久上

師徐熙，陳善上師易元吉，故傳色輕淡，過於林吳、林椿、李迪，各有相傳。韓祐、張仲則法學林椿，何浩則筆追李迪。劉興祖更從事韓祐，趙伯駒、伯驥自薪傳家法。至若武道光、左幼山、馬公顯、李安忠、李從訓、王會、吳炳、馬遠、毛松、毛益、李瑛、彭杲、徐世昌、王安道、宋碧雲、豐興祖、魯宗貴、徐道廣、謝昇、單邦顯、張紀、朱紹宗、王友端，則俱以花鳥擅名。或有師承，未經表著，或有己意，上合古人，真極一時之盛。金之龐鑄、徐榮之、元之錢舜舉、王淵、陳仲仁，俱稱大家，亦各有所師學。舜舉師趙昌，沈孟賢又師舜舉。王淵師黃筌，仲仁之畫，子昂歎爲黃筌復生。豈非得其心法哉。盛懋學陳仲美，林伯英學樓觀，能變其法，真青出於藍者。陳琳、劉貫道取法古人，集其大成。趙孟頫、史杲、孟玉潤、吳庭暉，俱稱能手。姚彥卿雖工，未免時習。趙雪巖設色有法，王仲元用墨溫潤。邊魯、邊武、善施、戲墨，均屬名家。明之林良、呂紀與邊文進齊名，而殷宏在邊呂之間。沈青門初學徐熙，趙昌、黃珍得黃筌筆意。譚志伊得徐黃之妙，殷自成可步志伊後塵。范暹、張奇、吳士冠、潘璿，俱稱能手。而潘尤得迎風承露之態。周之冕、陳淳、陸治、王問、張綱、徐渭、劉若宰、張玲、魏之璜之克，俱善墨卉。善墨卉者，世謂沈啓南之後，無如陳淳、陸治。

陳妙而不眞、陸眞而不妙、惟之冕兼之、俱文人寄興之筆、不事脂粉、以墨傳神、是以品重藝林、名超時輩、若學者之取法、必須上究黃徐師、其資格、旁求諸體、助以風神、方爲工而不俗、放而不野、則技也進乎道矣。

【譯】 宣和畫譜の、論を著はすや、謂はく、花木は五行の精を具へ、天地の氣を得、陰陽一嘘して敷榮し、一吸して榮斂す。則ち葩華秀茂して、百卉衆木に見はるる者、計るに勝ふ可からず。其の自ら形し自ら色する、造物未だ嘗て心を用ひずと雖も、而も大化を粉飾し、天下を文明にす。亦、衆目に観し、和氣を協ふる所以なりと。故に詩人は用ひて比興を寄す。因つて繪事を以て、自ら相表裡す。纖枝小萼、草卉を以て妍と稱すと雖も、若し全體大觀すれば、則ち木花を主と爲す。牡丹は其富麗を得、海棠は其妖嬈を得、梅は其清を得、杏は其盛を得、桃は穠、李は素、山茶は則ち豔にして丹砂を奪ひ、月桂は則ち香、金粟を生じ、以て楊柳・梧桐の清高なる、喬松・古柏の蒼勁なるに及ぶまで、之を圖繪に施せば、俱に、人の逸致を啓き、造化を奪ひて精神を移すに足る。厥の繪事を考ふるに、唐の、花卉に工なる者は、先んずるに翎毛を以てし、端を薛稷・邊鸞に肇む。梁廣・于錫・刁光・周暉・郭乾暉・乾祐が輩出するに至りて、俱に花鳥を以て名を著はす。五代の滕昌祐・鍾隱・黃筌父子、相繼ぎて起る。昌祐の若きは、心を筆墨に尙らにし、師資を借らず。鍾隱は郭氏弟兄を師承す。黃筌は善く諸家の長を集め、花は昌祐を師とし、鳥は刁光を師とし、龍鶴木石は、各々本づく所有り。而して子居實・居榮、復た能く其家法を紹ぐ。是を以て名、一時に重く、法、千古に傳はる、信に虚しからざるなり。故

に宋初の畫法は、全く黃氏父子を以て標準と爲す。宋に至りては則ち徐熙特起し、舊法を一變す。眞の前に古人無く、後に來者無し。黃筌・趙昌の間に在りと雖も、而も神妙獨り勝る。其貽厥崇嗣・崇矩は、家學相承け、眞に能く其祖武を繩ぐ。趙昌は傅色、其精妙を極め、特だ其形似を取るのみならず、且つ能く眞に其神を傳ふ。或は謂ふ、徐熙と黃筌・趙昌と相先後す。然れども筌の畫は神なれども妙ならず、昌の畫は妙なれども神ならずと。蓋し是れを謂ふか。故に易元吉は初め繪事に工にして、昌の畫を見、乃ち曰く、世、人に乏しからず、要す須く舊習を擺脫して古人を超軼すべし。方に能く其妙を極め臻ると。丘慶餘は、初め趙昌を師とし、晩年これに過ぎ、直に徐熙に繼ぐ。崔白・崔慤は、艾宣・丁昞・葛守昌・吳元瑜と、同じく召されて畫院に入り、名、一時に重し。艾宣も亦、徐趙の亞と稱せらる。丁昞は未だ黃徐と並び驅するに足らず。葛守昌は、形似少しく精しく、整齊太だ簡に、之に加ふるに學力亦速び、駸駸として以て進む。吳元瑜は、崔白を師とすと雖も、能く己の法を加ふ。即ち素より院體を爲すの人も、亦、元瑜に因りて其故態を革め、稍稍放逸にして、以て胸臆を寫し、時習を一洗し、前輩に追跡す。蓋し元瑜の力なり。劉常の花鳥は、米元章、之を見、以て趙昌に減ぜずと爲す。樂士宣は、初め丹青を學び、法、艾宣を愛す。後に乃ち宣の拘窘せるを悟り、獨り能く筆、前輩に超え、花鳥は其生意を得、宣を視ること淹淹として九泉下の人の如し。王曉は郭乾暉を師とし、法、未だ至らざるが若し。唐希雅及び其孫忠祚は、作る所の花鳥、特だ其形を寫すのみならずして、且つ兼ねて其性を得たり。劉永年・李正臣は、作る所各々其態を盡す。李仲宣は、花鳥頗る佳なり、但だ風韻瀟灑たるを欠く。南宋に至るに迨びて、時易り地遷りて、畫法又復た一變すと雖も、陳可久は、上、徐熙を師とし、陳善は、上、易元

吉を師とす。故に傳色輕淡なること、林吳に過ぎたり。林梅・李迪は、各々相傳有り。韓祐・張仲は則ち法、林椿を學び、何浩は則ち筆、李迪を追ふ。劉興祖は、更に韓祐に従事す。趙伯駒・伯暉は、自ら家法を新傳す。武道光・左幼山・馬公顯・李安忠・李從訓・王會・吳炳・馬遠・毛松・毛益・李瑛・彭杲・徐世昌・王安道・宋碧雲・豐興祖・魯宗貴・徐道廣・謝昇・單邦顯・張紀・朱紹宗・王友端の若きに至りては、則ち俱に花鳥を以て名を擅にす。或は師承有れども、未だ表著を經ず。或は己が意有りて、上、古人に合す。真に一時の盛を極む。金の龐鑄・徐榮之・元の錢舜舉・王淵・陳仲仁は、俱に大家と稱せらる。亦各々師とし學ぶ所有り。舜舉は趙昌を師とし、沈孟賢は、又、舜舉を師とす。王淵は黃筌を師とす。仲仁の畫は、子昂歎じて黃筌復た生ると爲す。豈に其心法を得るに非ずや。盛懋は陳仲美を學び、林伯英は樓觀を學び、能く其法を變ず。真に青、藍より出づる者なり。陳琳・劉貫道は、法を古人に取り、其大成を集む。趙孟頫・史扛・孟玉潤・吳庭暉は、俱に能手と稱せらる。姚彦卿は工なりと雖も、未だ時習を免れず。趙雪巖は、設色、法有り。王仲元は墨を用ふること温潤なり。邊魯・邊武は、善く戲墨を施す。均しく名家に屬す。明の林良・呂紀は、邊文進と名を齊しくす。而して殷宏は邊呂の間に在り。沈青門は初め徐熙・趙昌を學び、黃珍は黃筌の筆意を得、譚志伊は徐黃の妙を得、殷自成は志伊の後塵を歩す可し。范進・張奇・吳士冠・潘瑤は、俱に能手と稱せらる。而して潘尤も風を迎へ露を承くるの態を得たり。周之冕・陳淳・陸治・王問・張綱・徐渭・劉若宰・張玲・魏之瑣・之克は、俱に墨卉を善くす。墨卉を善くする者は、世謂ふ、沈啓南の後、陳淳・陸治に如くは無しと。陳は妙なれども真ならず、陸は真なれども妙ならず。惟だ之冕のみ之を兼ぬ。俱に文人の寄興の筆にして、脂粉を事とせず、墨を以て神を傳ふ。是を以て品、藝林に重んぜられ、

名、時輩に超ゆ。若し學者の、法を取るには、必ず須く上は黃徐を究め、其資格を師とし、旁ら諸體を求め、助くるに風神を以てすべし。方に、工なれども俗ならず、放なれども野ならずと爲す。則ち技や道に進むなり。【註】宣和畫譜之著論、ここに抄録する所は、宣和畫譜の花鳥の叙論より出づ。その論ずる所は、下文に關係する所少からず、又、卷首に載せたる王著の序も之より出づる所少からざるを以て、左に之を抄譯して參考に資す。其文に曰く、「陰陽一嘘して敷榮し、一吸して穠斂す。則ち葩華秀茂して、百卉衆木に見はるる者、計るに勝ふ可からず。其自ら形し自ら色する、造物未だ書て心を容れずと雖も、而も大化を粉飾し、天下を文明にす。亦、衆目に觀し和氣を協ふる所以なり。羽蟲は三百六十有り。聲音・顔色・飲啄・態度、遠くしては巢居し野處し、沙に眠り浦に泳ぎ、廣きに戯れ深きに浮び、近くしては屋を穿ち厦を賀し、歳を知り晨を司り、春に啼き晩に噪ぐ者、亦、其の幾何なるかを知らず。固より人事に預らずと雖も、然れども上古には采りて以て官稱と爲し、聖人は取りて以て象類に配し、或は以て著て冠冕と爲し、或は以て車服に畫く。豈に世に補無からんや。故に詩人の六義には、多く鳥獸草木の名を識り、而して律曆の四時には、亦、其榮枯語默の候を紀す。所以に繪事の妙、多く興を此に寓し、詩人と相表裏す。故に花の、牡丹・芍薬に於ける、禽の、鸞鳳・孔雀に於けるは、必ず之をして富貴ならしむ。而して松竹梅菊、鸚鵡雁鷺は、必ず之が幽閑を見はす。鶴の軒昂なる、鷹隼の擊搏する、楊柳梧桐の扶疏風流なる、喬松古柏の歲寒磊落なる、圖繪に展張して、以て人の意を興起する者は、率ね能く造化を奪ひて精神を移し、想を起くすること登臨して物を覽るの得る有るが若きなり」と。○五行、木火土金水の五つの元氣。○嘘、緩かに氣を吹き出すこと。○敷榮、花開放するなり。花の開くこと。榮は草の

花。王羲之の文に、今盛に榮を敷く、とあり。○吸、氣を吸ひ込むこと。○攀斂、東ねをさむるなり。ちぢかまること。花散り葉落つる等をいふ。○葩華、花なり。○秀茂、ひいでしげる。○大化、ここにては天地をいふ。○文明、文章ありて美しく、光ありて明かなること。○協、調和すること。○相表裡、相互に或は表となり或は裏となつて居る。○纖枝、細き枝。○小萼、小さき花。○妖嬈、なまめかしく美しきこと。○穠、花が多く盛にさきみだれたるさま。○素、白きこと。○奪丹砂、山茶の花の赤きを形容す。○月桂、木犀。○金粟、木犀の花の細くして黄なるを形容す。○薛稷、字は嗣通、唐の蒲州汾陰の人、道衡の曾孫なり。進士の第に擢てられ、太子少保・禮部尚書に歴官し、晉國公に封ぜらる。人物花鳥雜畫を善くし、鶴を畫きて名を知られ、神品に入る。外祖魏徵の家藏極めて富めるを以て、既に其觀に飢き、遂に意を銳くして之を學び、書畫並に進む。書は褚虞の體を得、天下に名あり。卒する年六十有五。○邊鸞、唐の京兆の人、右衛長史と爲る。貞元中、新羅國、孔雀を進む。善く舞ふ。鸞を召して之を寫さしむ。婆娑たる態を得、節奏に應ずるが如し。花鳥に長ず。折枝の草木・蜂蝶雀蟬、俱に妙品に入る。動植の意を得、設色に精し。○周昉、唐の人。水石花竹禽鳥頗る工なり。遠江近渚・竹溪翠岸を作り、四時風物の變、畫史に出づること一等。○郭乾祐、南唐の青州の人、乾暉の弟。花鳥を善くす。又、猫鷹筆を畫けば、則ち擊搏の意有り。○師資、師弟なり。師資を借らずとは、誰を師とし、誰の弟子といふこと無しとの意。○貽厥、孫をいふ。詩大雅文王有聲篇に、貽厥孫謀とあるに本づく。○其祖武を繩く、其祖の遺跡を繼ぐをいふ。武は跡なり。繩は繼ぐなり。詩大雅下武篇に、繩其祖武とあり。○擲脫、おしひらき、のぞく。韓偓の詩に擲脫舊習とあり。○艾宣、宋の鍾隱の人。竹卉翎毛

孤標高致にして、別に風規を具ふ。尤も野趣に長じ、特に清絶なるを見る。○丁昉、宋の濠梁の人。花竹翎毛に工なり。○追蹤、追蹤と同じ。○樂士宣、字は德臣、宋の祥符の人。内臣にして、初め職に東太乙宮官に蒞み、西京作坊使・持節度虔州諸軍事・虔州刺史・虔州管内觀察使致仕に至る。花鳥、生意を得、尤も水墨に工なり。時に北省の絶藝と稱せらる。心を冲淡に留め、意を詩書に一にす。歿して少保を贈らる。○拘窘、拘束窮窘なり。窮屈なること。○淹淹、奄奄と通ず、氣息僅に續くなり。息のふさがつて絶えかかるさま。○九泉下人、死したる人。○王曉、宋の泗水の人、翎毛叢棘を善くし、郭乾暉を師とし、鷹鷂は卒に其妙に至る。能く人物を畫く。○唐希雅、南唐の嘉興の人。初め後主の金錯刀の書法を學ぶ。其だ瘦せたるが若しと雖も、風神餘り有り。晩年、變じて畫を作る。書法猶ほ存す。善く竹樹を寫す。其の荆檟柘棘翎毛草蟲の類を爲る、多く郊野の眞趣を得たり。氣韻蕭疎にして、畫家の繩墨の拘する所に非ず。徐熙と同じく江南の絶筆と稱せらる。○唐忠祚、宋の人、唐希雅の孫。藝、從兄唐宿と同じく、特に其形を寫すのみならずして、物の性を曲盡す。花は美にして艶、竹は野にして簡、禽鳥羽毛は、精迅超逸にして、殆ど亦、技、妙に精なる者なり。○李正臣、字は端彦、宋の人、内臣にして、文思院使たり。花竹禽鳥を寫し、頗る生意有り、翔集群啄、各々其態を盡す。叢棘疎梅を作り、水邊離落幽絶の趣有り。○李仲宣、字は象賢、宋の人、内侍省の供奉官たり。始め窠木を専らにし、後能く意を燕雀の微に寓す。○地遷、宋は始め開封府に都せしが、金に亡ぼされて、南して都を金陵に遷せり。○陳可久、宋の人、寶祐の間、待詔たり。工に魚・四時の花卉を畫く。徐熙を師とす。筆力は淺しと雖も、設色鮮明なり。○陳善、宋の紹興の間の人。易元吉を學び、猿獐禽獸花果は、頗る能く眞に逼り。傅色



輕淡にして、林吳に過ぎたり。○林椿、宋の錢塘の人、淳熙の畫院の待詔たり、金帶を賜はる。花草翎毛瓜果に工に、趙昌を師とし、傅色輕淡にして生きたるが如し。○李迪、宋の河陽の人、宣和の畫院の成忠郎、紹興の畫院の副使たり、金帶を賜はる。花鳥竹石、頗る生意有り。間々山水の小景を作り、亦能く火を畫く。○韓祐、宋の石城の人、紹興の畫院の祇候たり、寫生小景を善くし、林椿の花鳥草蟲を師とす。○張仲、宋の人。寶祐の時の待詔たり。花鳥は林椿に並び、山水人物を善くす。○何浩、宋の人。花鳥は李迪を宗とす。○劉興祖、宋の人、花鳥は江泊清を師とし、後、韓祐に習ふ。○薪傳、一の薪は燒え盡くれども火は猶ほ他の薪に傳はるをいふ。轉して師弟の相傳ふるをいふ。莊子養生主篇に、指窮於爲薪。火傳也不知其盡也とあるに本づく。○武道光、宋の錢唐の人。東太乙宮の道士なり。善く六朝の古名畫を酒補す。又能く花鳥窠木竹石を作る。○左幼山、宋の人、錢塘の景靈宮の道士なり。花鳥山水人物を善くし、閻次平を師とす。○馬公顯、宋の人、馬興祖の子、紹興の間、承務郎・畫院待詔を授けられ、金帶を賜はる。花禽人物山水、自家の傳を得たり。○李安忠、宋の人、宣和の畫院の成忠郎なり。紹興の間、金帶を賜はる。花鳥走獸に工に、差や迪よりも高し。○李從訓、宋の杭の人、宣和の待詔たり。紹興の間、承直郎に補し、金帶を賜はる。道釋人物花鳥に工に、位置、凡ならず、傅采高く流輩を出づ。○王會、宋の人、字は元叟、端明公の長子、乾道の間、朝請大夫たり。花竹翎毛に工に、精細を窮極し、毫髪をも遺さず。○吳炳、宋の崑陵の人、紹興の畫院待詔たり。金帶を賜はる。折枝花鳥、巧なること造化を奪ひ、采繪精致富麗なり。○毛松、宋の崑山の人、一に沛の人と曰ふ。花鳥四時の景を善くす。○毛益、宋の人、松の子、乾道の畫院待詔たり。翎毛花卉に工に、尤も渲染を能くし、飛鳴せんと欲するに似たり。○李瑛、宋の人、安忠の子、紹興の畫院待詔たり。家傳、花竹禽獸を畫く。○彭杲、杲は一に阜に作る。宋の錢塘の人、林椿を師とし、花果を寫生す。○徐世昌、宋の石城の人、徐本の從子にして、花鳥に工なり。○王安道、宋の人、李迪の花鳥を宗とす。○宋碧雲、宋汝志は、碧雲と號す。錢塘の人。宋の景定の間、畫院待詔たり。元に入りて開元觀の道士と爲る。人物山水花竹翎毛は樓觀を師とす。○豐興祖、宋の錢塘の人、景定の畫院の待詔たり。人物山水界畫に工に、花鳥は李嵩を師とす。○魯宗貴、宋の錢塘の人、紹定の畫院の待詔たり。花竹鳥獸窠石、描染極めて佳なり。尤も寫生に長ず。雞雛鴨黃、最も生意有り。○徐道廣、古巖と號す。宋の杭州の人。景定の年、待詔たり。花鳥は樓觀を師とす。○謝昇、字は東暉、宋の杭の人、景定の年、待詔たり。花竹士女を善くす。○張紀、宋の錢塘の人、李迪の花竹禽獸を師とす。○朱紹宗、宋の人、籍は畫院に隸す。人物猫犬花禽の描寫精邃にして、遠く流輩に過ぐ。○王友端、宋の人、獵犬に工に、花鳥を善くす。○顧鑄、字は才卿、默翁と號す。金の遼東の人、一に大興の人と曰ふ。少くして第に擢んでられて聲有り。南渡の後、翰林の待制と爲り、戶部侍郎に遷さる。貴戚の事に坐して、出でて東平に倅たり。明昌中、官、京兆轉運使に至る。山水禽鳥を善くし、博學にして文を能くし詩に工に、造語奇健にして凡ならず。書も亦蘊藉なり。○徐榮之、金の人、花鳥に工なり。○沈孟賢、元の人、花鳥真に錢選に逼る。○林伯英、元の嘉興魏城の人、畫に工に、花鳥は樓觀を師とす。○樓觀、宋の錢塘の人、咸淳の畫院待詔たり。花鳥人物山水は、馬夏の筆法を得、傅色絶だ之に似たり。○青出於藍、弟子が師匠よりもまさりたるをいふ。荀子の勸學篇に、青は藍より出でて藍よりも青し、とあるに本づく。○陳琳、宋の人、字は仲美、珪の子。山水人物花鳥、

俱に古人を師とし、妙に臻らざる無し。論者謂ふ、南渡二百年、此手筆無しと。○劉貫道、字は仲賢、元の中
山の人。貞元の時、御容を寫して旨に稱ひ、衣局使に補せらる。釋道人物鳥獸花竹、一一、古を宗とし、高く
時輩に出づ。山水は郭熙を宗とす。○史杲、元の人、字は柔明、橘齋道人と號す。燕の永清の人、官、湖廣行
省右丞に至る。讀書の餘暇、筆を弄びて人物山水花竹翎毛を作り、成精到を極む。○孟玉潤、孟珍は元の人、
字は玉潤、字を以て行はる。又の字は季生、天澤と號す。花鳥翎毛、當世の珍と爲す。尤も青綠山水に長ず。
○吳庭暉、元の吳興の人、青綠山水に工に、花鳥も亦精密なり。○趙雪巖、一に雲巖に作る。元の温州の人、
華亭青龍鎮に寓す。花鳥設色、法有り、墨竹を善くす。○王仲元、元の人、花鳥は墨法を得、尤も小景を善く
し、溫潤にして喜ぶ可し。○邊武、元の人、字は伯京、京兆の人、戲墨花鳥を善くし、枯木竹石に工なり。行
草は、鮮于太常を學び、能く眞を亂す。○邊魯、元の人、字は至愚、魯生と號す。宣城の人、南臺宣使と爲る。
戲墨花鳥を善くし、古文奇字に工なり。○殷宏、明の人。翎毛は呂紀、邊文進の間に在り。○沈青門、明の沈仕
は字は懋學、一字は子登、青門山人と號す。仁和の人。雅と詩翰を好み、多く法書・名畫を蓄へ、朝夕展玩す。
之を久しうして得る有り、筆を授りて花鳥山水を揮灑し、風神氣韻、殊に専門に勝り、更に妙品に入る。藝に
翰墨に遊び、江湖詩人第一流と稱せらる。○譚志伊、明の人、字は公望、又の字は思重、一に思仲と曰ふ。學
山と號す。無錫の人。父の廢を以て中府に官たるを得、花卉翎毛、點綴娟秀にして、宋人の法の外に出づ。兼
ねて文翰に工に、字は曹娥の碑を學ぶ。○殷自成、明の人、字は元素、無錫の人、花鳥工緻にして、談志伊の
後塵を歩す。○范暹、明の人、字は啓東、一に起東と曰ふ。館閣の名公多く之を重んず。人、葦齋先生と稱す。

崑山の人。永樂中、取られて畫院に入る。花竹翎毛、人多く之を尙ふ。書法に工なり。帳を設けて徒に授け、
造就する所多し。○張奇、清の人、字は正甫、江都の人、山水は巨然の法を得、人物花草に工なり。篆籀の印
章を兼ぬ。私に按ずるに、上の范暹・下の吳士冠・潘璋は皆明の人なるに由りて觀れば、ここに張奇とあるは張
一奇の誤なるべし。張一奇は明の人、字は彥卿、自ら散仙と號す。沙縣の人。嘉靖の間、召されて便殿に畫き、
旨に稱ひ、錦衣千戸を授けらる。翎毛山水の名、時に聞ゆ。○吳士冠、明の人、字は相如、蘇州の人。山水墨
花、頗る別趣あり、書を善くす。○潘璋、明の人、字は在衡、無錫の人、風を迎へ露を承け綽約たる花卉を寫
生し、姿態百出す。○周之冕、明の人、字は少谷、長洲の人。花鳥を寫意し、兼ねて陳淳・陸治の法を兼ね撮
り、最も神韻有り。設色鮮雅にして、蹊徑、趣を異にす。後人の贋作頗る多し。其眞蹟は固より是れ斐然とし
て章を成す。古隸を善くす。○張綱、佩文齋書畫譜・畫史彙傳並に張綱を載せず。或は曰はく、綱は廣の誤なら
んと。果して然るや否やを詳かにせず。張廣は、明の人、字は秋江、無錫の人。畫を善くし、芙蓉・花卉を寫
し、極めて妙なり。嘉靖中、内廷に待詔たり。世宗、其萬福圖を見て之を賞し、盡く畫く所を進めしむ。是に
於て、宦者盡く廣に屬して圖を爲らしめ、將に獻して以て寵を邀へんとす。廣、疾と辭して可かず。明日、之
を探れば、已に南に歸れり。○劉若宰、明の人、字は蔭平、懷寧の人。崇正戊辰の殿試の第一人なり。經筵に
進み、仕へて諭徳と爲る。戲に墨花を作り、別趣有り。詩歌雋雅、兼ねて臨池を善くす。體質清癯にして、未
だ久しからずして疾みて卒す。中外これを惜む。○張玲、明の人、字は子重、一に子仲に作る。秋江と號す。
花鳥に長じ、水墨、花葉を點染し、白筋を露出す。描寫生動し、意、筆墨の外に在り。○魏之瑛、明の人、字

は考叔、上元の人。毎月必ず大士の像を畫きて、これを寺院に施す。山水は宋人を宗とし、花卉は王若水を宗とす。閩齊魯の間極めて之を重んず。詩は清迥にして俗を絶つ。詩を以て名あらざるは、畫を以て掩はるればなり。書は黃庭を法とし、結構微密、神采流麗なり。性孝友にして、老親を養ひ、諸弟を撫す。皆、給を硯田に仰ぐ。○魏之克、字は和叔、之瑣の弟なり。山水は兄に似たり。詩に工なり。

【解】 宣和畫譜の花鳥叙論に論じて云ふ、花木は木火土金水の五行の精氣を具備し、天地の元氣を得たものである。陰陽の二氣が緩かに氣を吐き出すと枝や葉が茂り花が咲き、氣を吸ひ込むと花は散り葉は落ちて收縮する。斯くていろ／＼な草や木に、秀茂したる花を著けることは、數へ切れないほどである。その花は自然に形を爲し、自然に色彩が出来るのであつて、造物者は未だ嘗てそれが爲めに心を用ひたのでは無いけれども、その花は天地を飾り、天下をはなやかにするのであり、亦、衆人の目に觀して和氣を協調する所以でもあると、それ故に詩人はそれを用ひて比興を寄せ、又、繪事も自然にそれと表となり裏となつて居る。纖い枝や小さい蔓では、草花を妍麗であると稱するけれども、若し全體から大觀すると、木の花が主である。牡丹は富麗であり、海棠は妖嬈であり、梅は清であり、杏は盛であり、桃は穠であり、李は素であ

り、山茶は艶であつて丹砂にまさり、月桂は香高くして金色の粟の如く、その他、楊柳・梧桐は清高であり、喬き松・年古りたる柏は蒼勁であるが、それ等の者を圖繪にあらはすときは、いづれも、人の逸致を啓發し、造化の力を奪ひ、人の精神を轉移するに足るのである。さて其繪事を考察するに、唐代の花弁を畫くことの巧であつた人は、それに先だつて翎毛をも能くしたのであつて、薛稷・邊鸞に始まつた。次いで梁廣・刁光・周滉・郭乾暉・乾祐が輩出し、いづれも花鳥を以て著名である。五代には滕昌祐・鍾隱・黃筌父子が相繼いで起つた。昌祐は専ら心を筆墨に盡して、誰を師として學んだといふことは無い。鍾隱は郭氏兄弟(即ち乾暉・乾祐)を師として學んだ。黃筌は善く諸家の長所を集め、花は昌祐を師とし、鳥は刁光を師とし、龍鶴木石は、それぞれ本づく所が有つた。そして子居實・居實は、能く其家法を繼いだ。そこで、名聲は當時に重んぜられ、畫法は後世に傳はつたのであつて、決して虛名虛傳では無い。それ故に宋の初の畫法は全く黃氏父子を標準とした。宋に至つては、徐熙が傑出してゐて、舊來の畫法を一變した。眞に前に古人無く、後に來者無しといふべきであり、黃筌と趙昌との間に在るけれども、神妙の點に於て獨り卓絶してゐた。その孫の崇嗣、

崇矩は、家學を繼承して、その祖父の遺跡を繼いだ。趙昌は、彩色が極めて精妙であり、まだ其形が善く似て居るのみならず、且つ能く其神を傳へた。或るひとは、徐熙と黃筌・趙昌とは、互に先となり後となり、各々長所が有る。然し筌の畫は神であるけれども妙でない。昌の畫は妙であるけれども神でない。と曰つて居るのは、蓋し是れを謂ふのであらう。それ故に、易元吉は、初め繪事に工であつたが、昌の畫を見て曰つた、世には畫に工なる人が少くない。必ず舊來の風習を脱却して古人を超越することとを要する。斯くて始めて其妙を極めることが出来る。丘慶餘は、初め趙昌を師として學んだが、晩年には彼よりも勝つて、直に徐熙に繼いだ。崔白・崖慤は、艾宣・丁昞・葛守昌・吳元瑜と與に、召されて畫院に入り、名聲、當時に重んぜられた。艾宣も亦、徐熙・趙昌の亞流と稱せられて居る。丁昞は未だ黃筌・徐熙と同等とすることは出来ない。葛守昌は、形似を専らとせず、整齊を事とせず、且つ學力も十分であつたので、屢屢として進んだ。吳元瑜は、崔白を師として學んだけれども、能く自己の法を加へた。そこで從來、院體を畫いた人も、元瑜の爲めに、これまでの風を革め、漸次に放逸の筆を以て、自己の胸中を寫し出し、當時の風習を一洗し、古人に追蹤するやうになつた。これは元瑜の力である。劉常の花鳥は、米元章は之を見て、趙昌に劣らないと曰つた。樂士宣は、初めに繪事を學ぶのに、艾宣を法とし愛して居たが、後に宣の畫法の窮屈なることを悟り、その獨特の筆は先輩に超越し、その畫きたる花鳥は、生動の意思を得た。それに比べると、宣は氣息淹淹として地下の人の如くである。王曉は、郭乾暉を師として學んだが、未だ及ばないやうである。唐希雅は其孫の忠祚が畫く所の花鳥は、ただ其形を寫し得たるのみならず、且つ其性情を寫し得て居る。劉永年・李正臣が畫く所は、各々其態を十分に寫して居る。李仲宣の畫く所の花鳥は頗る佳であるが、但だ瀟洒たる風韻を缺いて居る。南宋に至つては、時も易り地も遷り畫法も一變したけれども、陳可久は、古の徐熙を師として學び、陳善は、古の易元吉を師として學んだ。故に彩色の輕淡なることは、林椿・吳炳に優つて居る。林椿・李迪は、各々相傳するところがある。韓祐・張仲は林椿を學び、何浩は李迪を學んだ。劉興祖は更に韓祐を學んだ。趙伯駒・伯驥は、自ら家法を傳へた。武道光・左幼山・馬公顯・李安忠・李從訓・王會・吳炳・馬遠・毛松・毛益・李瑛・彭杲・徐世昌・王安道・宋碧雲・豐興祖・魯宗貴・徐道廣・謝昇・單邦顯・張紀・朱紹宗・王友端などは、いづれも、花鳥を以て名を擅にした。或は師

うになつた。これは元瑜の力である。劉常の花鳥は、米元章は之を見て、趙昌に劣らないと曰つた。樂士宣は、初めに繪事を學ぶのに、艾宣を法とし愛して居たが、後に宣の畫法の窮屈なることを悟り、その獨特の筆は先輩に超越し、その畫きたる花鳥は、生動の意思を得た。それに比べると、宣は氣息淹淹として地下の人の如くである。王曉は、郭乾暉を師として學んだが、未だ及ばないやうである。唐希雅は其孫の忠祚が畫く所の花鳥は、ただ其形を寫し得たるのみならず、且つ其性情を寫し得て居る。劉永年・李正臣が畫く所は、各々其態を十分に寫して居る。李仲宣の畫く所の花鳥は頗る佳であるが、但だ瀟洒たる風韻を缺いて居る。南宋に至つては、時も易り地も遷り畫法も一變したけれども、陳可久は、古の徐熙を師として學び、陳善は、古の易元吉を師として學んだ。故に彩色の輕淡なることは、林椿・吳炳に優つて居る。林椿・李迪は、各々相傳するところがある。韓祐・張仲は林椿を學び、何浩は李迪を學んだ。劉興祖は更に韓祐を學んだ。趙伯駒・伯驥は、自ら家法を傳へた。武道光・左幼山・馬公顯・李安忠・李從訓・王會・吳炳・馬遠・毛松・毛益・李瑛・彭杲・徐世昌・王安道・宋碧雲・豐興祖・魯宗貴・徐道廣・謝昇・單邦顯・張紀・朱紹宗・王友端などは、いづれも、花鳥を以て名を擅にした。或は師

承する所が有るけれども、未だ明かに知られて居らぬ。或は自己の意を用ひて居るけれども、上、古人に合致して居る。眞に一時の隆盛を極めた。金の龐鑄・徐榮之・元の錢舜舉・主淵・陳仲仁は、いづれも大家と稱せられて居る。これ等は亦各々師として學ぶ所があつた。舜舉は趙昌を師として學び、沈孟賢は、又、舜舉を師として學んだ。王淵は黃筌を師として學んだ。陳仲仁の畫は、趙子昂が見て、黃筌が復た生れた、と賛歎した。其心法を得たのである。盛懋は陳仲美を學び、林伯英は樓觀を學び、能く其畫法を變化した。眞に藍より出でて藍よりも青き者である。陳琳・劉貫道は、古人を法として學び、集めて大成した。趙孟頫・史弼・孟玉潤・吳庭暉は、いづれも能手と稱せられた。姚彥卿は工であるけれども、未だ當時の風習を脱しない。趙雪巖は、設色が宜しきを得た。王仲元は墨の用ひかたが温潤である。邊魯・邊武は、善く戲墨を爲した。これ等はいづれも名家である。明の林良・呂紀は、邊文進と同等の名聲があつた。そして殷宏は邊文進と呂紀との間に位する。沈青門は初め徐熙・趙昌を學んだ。黃珍は黃筌の筆意を得た。譚志伊は徐熙・黃筌の妙處を得た。殷自成は、志伊に次ぐに足つて居る。范暹・張奇・吳士冠・潘瑤は、いづれも、能手と稱せられて居る。そして潘瑤は尤

も風に吹かれ露に濕うて居る態を得て居る。周之冕・陳淳・陸治・王問・張綱・徐渭・劉若宰・張玲・魏之瓚・之克はいづれも墨がきの花卉を善くした。墨がきの花卉を善くする者は、世人は、沈啓南以後、陳淳と陸治に及ぶ者は無い、と謂つて居る。陳は妙であるけれども眞ではない。陸は眞であるけれども妙では無い。惟だ之冕のみ眞と妙とを兼ねて居る。いづれも文人が感興を寄せた筆であつて、彩色を事とせず、墨を以て其精神を傳へて居る。それ故に畫品高くして藝林に重んぜられ、名聲は當時の畫人を超越した。若し花鳥を學ぶ者が、法を取るには、必ず上は黃筌・徐熙を究めて、其格法を師として學び、旁ら諸種の體製を求め、風神を以て之を助くることを要する。斯くて始めて精工であるけれども卑俗でなく、放逸であるけれども粗野でないものが出来る。さすれば其技は進んで道に入ることが出来るのである。

畫 枝 法

花卉木本之枝梗與草本有異。草花宜柔媚。木花宜蒼老。非特此也。更有四時之別。卽春花中不獨梅杏桃李花異。枝亦各有不同。梅之老幹宜古。嫩枝宜瘦。

始有鐵骨峻崢之勢。桃條須直上而粗肥。杏枝宜圓潤而回折。舉此三者。餘可概見。至於松柏。則根節須盤錯。桐竹則枝幹須清高。作折枝。從空安放。或正或倒。或橫置。須各審勢得宜。枝下筆鋒帶攀折之狀。不可平截。若作果實。更宜取勢下墜。方得其致也。

【譯】 花卉の木本の枝梗は、草本と異なる有り。草花は宜しく柔媚なるべし。木花は宜しく蒼老なるべし。特だ此れのみ非ざるなり。更に四時の別有り。即ち春花の中、獨り梅杏桃李の花異なるのみにあらず、枝も亦各々同じからざる有り。梅の老幹は宜しく古なるべし。嫩枝は宜しく瘦すべし。始めて鐵骨峻崢の勢有り。桃條は宜しく直上して粗肥なるべし。杏枝は宜しく圓潤にして回折すべし。此三者を擧ぐれば、餘は概見す可し。松柏に至りては、則ち根節須く盤錯すべし。桐竹は則ち枝幹宜しく清高なるべし。折枝を作るには、空より安放し、或は正、或は倒、或は横に置き、須く各々勢を審かにして宜しきを得べし。枝下の筆鋒は、攀折の狀を帯び、平截す可からず。若し果實を作らば、更に宜しく勢を取りて下墜すべし。方に其致を得るなり。【註】 柔弱、やはらかにしなやかなること。○蒼老、古びてつよきこと。○鐵骨峻崢、梅の枝振の勁くしてごつ／＼したるを形容するなり。峻崢は山の高く峻しきを形容する語なり。○粗肥、ふとくして肥またること。粗は細と對し、太きこと。○圓潤、圓くしてふつくりしたること。○回折、くね／＼とまがること。○盤錯、わだかまり入り組むこと。○安放、安置するなり。放は置くこと。空より安放すとは、根も無く、幹も無く、

いきなり紙面に折枝を書きあらはすをいふ。○枝下、枝のもと。即ち枝の折れ口。○攀折、ひきをる。手を以て引つばつて折ること。○平截、たひらに切る。刀又は剪刀にてきちんと切り取りたるが如きをいふ。

【解】 花卉の中で、木本の枝や梗は、草本とは異なつて居る。草花の枝や梗は、やはらかくしなやかなるが宜しい。木花の枝や梗は、古びて勁いが宜しい。ただそればかりでは無く、更に春夏秋冬の四時の區別がある。即ち春の花の中でも、ただ梅杏桃李の花が異なつて居るばかりでは無く、枝もそれ／＼同じくないところがある。梅の老いたる幹は古びたのが宜しく、嫩い枝は瘦せて居るが宜しい。斯くて始めて鐵骨峻崢たる勢が出るのである。桃の條はまつ直に伸びて太く肥えて居るが宜しい。杏の枝は、圓みがあつてふつくりして、くね／＼と曲つて居るが宜しい。この三つの者を擧げれば、其餘は大略分るであらう。松や柏は、根や節がわだかまつて入り組んで居ることとを要する。桐や竹は、枝や幹がすつきりこして高いが宜しい。折枝を畫く場合には、根も幹も無く、いきなり紙面に書きあらはし、或は正面に、或は倒まに、或は横に置き、それ／＼勢を審かにして宜しきを得るやうにすることを要する。枝の切り口の筆づかひは、手で引つ張つて折つたやうな狀を帯びるやうにする。刃物できちんと切つ

たやうにしてはならぬ。若し果實を畫くときは、更に、勢をつけて枝が下に垂れるやうにするが宜しい、斯くて始めて其致を得るのである。

畫花法

木花五瓣者居多。梅杏桃李梨茶是也。梅杏桃李、不獨色異、其瓣形亦各宜區別。若牡丹爲花王、自不與衆花同類。其瓣更多不同。紅者瓣多而長、中心起頂、紫者瓣少而圓、中心平頂。石榴山茶梅桃、俱有千葉。玉蘭放如蓮苞、繡毬攢若梅朵。藤本之薔薇、玫瑰、粉團、月季、酴醾、木香、其苞蒂蕊萼雖同、然開時顔色各異。薔菊瓣同、茉莉大小形殊。丹桂花若山礬。春秋時別海棠、中西府之與垂絲、考蒂須分、梅花中綠萼之與蠟梅、心瓣自異。此花皆四時所有、衆目同觀、細心自能得其形色。至于殊方異種、及木果藥苗之花、間有寫入丹青、則不暇細舉其名狀。

【譯】木花は、五瓣なる者、多きに居る。梅・杏・桃・李・梨・茶是れなり。梅・杏・桃・李は、獨り色の異なるのみにあらず、其瓣形も亦各々宜しく區別すべし。牡丹の若きは、花王と爲す。自ら衆花と類を同じくせず。其

瓣は更に多く同じからず。紅なる者は瓣多くして長く、中心起頂す。紫なる者は、瓣少くして圓く、中心平頂なり。石榴・山茶・梅・桃は、俱に千葉有り。玉蘭は放きて蓮苞の如く、繡毬は攢まりて梅朵の若し。藤本の薔薇・玫瑰・粉團・月季・酴醾・木香は、其苞蒂蕊萼は同じと雖も、然れども開く時は顔色各々異なり。薔菊は、瓣は茉莉に同じけれども、大小形殊なり。丹桂花は山礬の若くなれども、春秋時別なり。海棠の中、西府と垂絲とは、萼蒂須く分つべし。梅花の中、綠萼と蠟梅とは、心瓣自ら異なり。此花は皆四時の有る所、衆目同じく觀る。細心にせば自ら能く其形色を得ん。殊方の異種、及び木果藥苗の花、間々丹青に寫し入るる有るに至りては、則ち細に其名狀を擧ぐるに暇あらず。

【註】千葉、八重の花のこと。○玉蘭、白もくれん。○繡毬、てまりばな。○藤本、藤の如く長く伸ぶる植物をいふ。○玫瑰は、はまなす。粉團は、てまり。月季は長春。酴醾は、こやをき、本草綱目に、酴醾の花の最も大なる者は、佛見笑と名づけ、其の小なる者を木香と名づく、とあり。俗に茨牡丹といふ。以上は皆、薔薇の類なり。○薔菊、梔子の花なり。原本に薔菊に作れるは誤なり。因に記す、誤字脱字あるを免れざるは、古今の圖書の常なれども、此冊の原本には、脱字誤字特に少からず、氣のつきたる者は、すべて訂正したれども、一一註記するの類に堪へず。原本と此本とに文字の異同あるは、活字の誤植に非ざる限り、すべて此本を正しとすべし。○茉莉、まつりくわ、まうりんくわ、まりくわ、もりくわ等と呼ぶ。○丹桂、金木犀。○山礬、そめしば。○西府、垂絲、海棠の種類の名。○綠萼、あをぢく。梅の一種。○殊方、外國。

【解】 木の花は、五瓣なる者が多い。梅・杏・桃・李・梨・茶がそれである。梅・杏・桃・李は、ただ色が異なつて居るのみならず、其瓣の形もそれと區別すべきである。牡丹は花の中の王である。自然に衆くの花と類を同じくしない。其瓣は更にいろいろな相異がある。紅色なる者は、瓣が多くて長く、中心は高くなつて居る。紫色なる者は、瓣が少くて圓く、中心は平になつて居る。石榴・山茶・梅・桃には、いづれも八重の花がある。玉蘭は開くときは蓮の苞の如く、繡毬は梅の花の朶の如く攢まつて居る。藤本の薔薇・玫瑰・粉團・月季・醉藤・木香は苞・蒂・蕊・萼は同じいけれども、開く時には顔色がそれと異なつて居る。薔薇は、瓣は茉莉と同じいけれども、形に大小の相違がある。丹桂の花は山礬の如くであるけれども、咲く時に春と秋との相違がある。海棠の中で、西府と垂絲とは、萼も蒂も區別することを要する。梅花の中で、綠萼と蠟梅とは、心も瓣も相異なつて居る。此等の花は、皆、春夏秋冬四時に咲いて居るもので、誰の目にも観て居るものであるから、細心に注意せば、自然に其形と色とを心得ることが出来る。外國のかはつた種類や、果實藥種の木の花などは、間ま寫して繪の中に入れられるのであるが、それ等は、詳細に其名や狀を列擧することは出来かねる。

畫葉法

草花葉柔嫩、木花葉深厚、此定説也。然于木花中、其葉當春與花並放、如桃李棠杏、雖屬木花、葉亦宜柔嫩、秋冬之葉、自宜更加深厚矣。草花葉柔嫩、故宜間以反葉。至于桂、橘、山茶之類、則歷霜雪而未凋、經風露而不動、其色雖宜深厚、而葉之有陰陽向背、理所固然、亦不可不用反葉。但此種正葉用綠宜深、反葉用綠宜淺。凡葉渲染後、必鈎筋、筋之粗細、須與花形稱、筋之濃淡、須與葉色稱。人第知葉之用綠、分有深淺、而不知葉之用紅、亦分嫩衰。凡春葉初生、嫩尖多紅、秋木將落、老葉先赤、但嫩葉未舒、其色宜脂、敗葉欲落、其色宜赭。每見舊人花果、濃綠葉中、亦略露枯焦蟲食之處、轉以之取勝、又不可不知也。

【譯】 草花の葉は柔嫩にして、木花の葉は深厚なるは、此れ定説なり。然れども木花の中に于て、其葉、春に當りて、花と並に放くこと、桃李棠杏の如きは、木花に屬すと雖も、葉は亦宜しく柔嫩なるべし。秋冬の葉は、自ら宜しく更に深厚を加ふべし。草花の葉は柔嫩なり、故に宜しく間ふるに反葉を以てすべし。桂橘山茶の類に至りては、則ち霜雪を歷れども未だ凋まず、風露を經れども動かず、其色は宜しく深厚にすべしと雖も、

而も葉の陰陽向背有るは、理の固より然る所なれば、亦、反葉を用ひざる可からず。但し此種の正葉は緑を用ふる可宜しく深かるべく、反葉は緑を用ふる可宜しく淺かるべし。凡そ葉は渲染して後、必ず筋を鈎す。筋の粗細は、須く花形と稱ふべし。筋の濃淡は、須く葉色と稱ふべし。人は第だ、葉の緑を用ふるには、分ちて深淺有ることを知りて、葉の紅を用ふるにも亦嫩衰を分つことを知らず。凡そ春葉初めて生ずるとき、嫩尖多く紅なり。秋木將に落ちんとするとき、老葉先づ赤し。但し嫩葉未だ舒びざるは、其色、脂に宜し。敗葉落ちんと欲するは、其色、緒に宜し。毎に舊人の花果を見るに、濃緑の葉中に、亦、略しく枯焦蟲食の處を露はし、轉つて之を以て勝を取る。又、知らざる可からざるなり。

【註】深^〇厚、深は色の濃きをいひ、厚は、あつさの厚きをいふ。下文に深の字を重く用ひたる所あり、又厚の字を重く用ひたる所あり。〇反葉、うらがへりたる葉。〇向背、正面に向きたるものと、背面なるものと。〇嫩尖、若葉のさき。〇枯焦、枯れたること。

【解】草の花の葉は柔嫩であつて、木の花の葉は深厚いことは、一定したる説である。けれども木の花の中に於て、その葉が春に於て、花と一緒にのびるもの、桃・李・海棠・杏の如き類は、木の花ではあるけれども、その葉は柔嫩にするが宜しい。秋から冬の木の葉は、一層深厚するが宜しい。草の花の葉は柔嫩である。故に間に裏がへつて居る葉を雜へるが宜しい。桂・橘・山茶の類は、霜や雪を経ても凋むこと無く、風や露に

さらされても動くことは無いので、其色は深厚するが宜しいけれども、葉に陰陽向背があることは、理法に於て當然のことであるから、これ等の木にも、背面の葉を用ひなければならぬ。但しこれ等の木の正面の葉は、濃い緑を用ひるが宜しく、背面の葉は、淡い緑を用ひるが宜しい。すべて葉は渲染して後に、必ず筋を書き入れる。筋の太さは、花の形と釣り合ふやうにすることを要する。筋の色の濃淡は、葉の色と釣り合ふやうにすることを要する。世人は、只だ、葉に緑色を用ひるのに濃い淡いとを區別すべきことを知つて居るが、葉に紅色を用ひるにも、嫩葉と衰へたる葉とを區別することを知らない。すべて春になつて木の葉が初めて出た時には、嫩葉の尖は多くは紅色である。秋になつて木の葉が落ちようとする時には、老いたる葉が先づ赤色になる。但し春の嫩葉のまだ舒びないのは、其色は胭脂を用ひるが宜しい。秋の枯れ葉の落ちかかつて居るのは、その色は岱赭を用ひるが宜しい。毎に古人の花果の畫を見るに、濃緑の葉の中にも、少しばかり枯れた處や蟲の食つた處を露はして趣を得るやうにしてある。これは知つて置かねばならぬことである。

畫 蒂 法

梅杏桃李海棠之類其花五瓣蒂亦相同。即其蒂形亦同。于花瓣花瓣尖者蒂尖。團者蒂團。鐵梗蒂連於梗。垂絲蒂垂。紅絲山茶層蒂鱗起。石榴長蒂多歧。梅蒂色隨花之紅綠。桃蒂兼紅綠。杏蒂紅黑。海棠蒂殷紅。各有反正見。鬚見。蒂之分。玉蘭木筆蒂苞蒼緒。薔薇蒂綠而長。其尖則紅。此乃花蒂中之所當分別者。

【譯】梅・杏・桃・李・海棠の類は、其花五瓣なれば、蒂も亦相同し。即ち其蒂の形も、亦、花瓣に同じ。花瓣の尖れる者は蒂尖り、團き者は蒂團し。鐵梗の蒂は梗に連なり、垂絲の蒂は紅絲を垂る。山茶の層蒂は鱗起し、石榴の長蒂は多岐なり。梅の蒂の色は花の紅綠に隨ひ、桃の蒂は紅綠を兼ね、杏の蒂は紅黑、海棠の蒂は殷紅。各々反正、鬚を見蒂を見るの分有り。玉蘭・木筆の蒂苞は蒼緒、薔薇の蒂は綠にして長く、其尖は則ち紅なり。此れ乃ち花蒂の中の當に分別すべき所の者なり。

【註】鐵梗、鐵梗海棠。木瓜の類。○垂絲、垂絲海棠。○層蒂、層層にもかさなりたる蒂。○殷紅、くろずんだ赤色。○見鬚見蒂、正面なる花は鬚を見るを得れども蒂を見るを得ず、背面なる花は蒂を見るを得れども鬚を見るを得ざるなり。○木筆、こぶし。○蒼緒、くすみたる緒色。

【解】梅・杏・桃・李・海棠の類は、其花が五瓣であるときは、蒂も亦同じく五瓣になつて

居る。即ち其蒂の形も、花瓣と同じい。花瓣の尖つて居る者は蒂も尖つて居り、花瓣の團い者は蒂も團い。鐵梗海棠の蒂は梗に連なつて居り、垂絲海棠の蒂は紅い絲を垂れて居る。山茶の幾重にも重なつて居る蒂は鱗の重なつて居るが如くであり、石榴の長き蒂は幾つにも岐れて居る。梅の蒂の色は花の色の紅なるか綠なるかに隨つて、或は紅であり、或は綠である。桃の蒂は紅色と綠色とを兼ねて居る。杏の蒂は紅黒である。海棠の蒂はくろずんだ赤色である。各々正面と反面との區別があり、正面なる者は蕊が見え、反面なる者は蒂が見えるのであつて、それを區別すべきである。玉蘭・木筆の蒂苞は、くすんだ岱緒色である。薔薇の蒂は綠色にして長く、其尖は紅色である。此等は、花の蒂の中で分別すべき所の者である。

畫 心 蕊 法

凡木花之心由蒂而生。如梅杏之類。正面雖不見蒂。而心中一點。與蒂相表裡。爲結實之根。亦攢五小點。而生鬚鬚尖生黃蕊。梅杏海棠鬚蕊亦各有分別。梅宜清瘦。桃杏宜豐滿。時不同也。且白梅與紅梅。又各不同。白梅更宜清瘦。紅梅

略加豐滿然亦勿類紅杏花之不同亦先見於心矣。

【譯】木花の心は、蒂に由りて生ず。梅・杏の類の如き、正面は蒂を見ずと雖も而も、心中の一点、蒂と相表裡し、實を結ぶの根と爲す。亦、五小點を攢めて鬚を生じ、鬚尖に黄蕊を生ず。梅杏海棠の鬚は、亦各々分別有り。梅は宜しく清瘦なるべく、桃杏は宜しく豐滿なるべし。時、同じからざればなり。且つ白梅と紅梅とは、又各々同じからず。白梅は更に宜しく清瘦なるべし。紅梅は畧しく豐滿を加ふ。然れども亦、紅杏に類する勿かれ。花の同じからざるは、亦先づ心に見はる。

【註】蒂、蒂と異體同字なり。○心中一点、心の中央の一点、即ち雌蕊をいふ。○鬚、雄蕊をさす。○黄蕊、黄色なる蕊。この蕊の字は蕊の意に用ふ。蕊とは雄蕊の端の黄色にして花粉を出す部分をいふ。○時不同也、梅の花は早春のまだ寒き時に咲き、桃・杏などは、春暖に至つて咲くをいふ。

【解】木の花の心は、蒂から出て居る。梅や杏の類は、花の正面からは蒂は見えないけれども、心の中央の一点即ち雌蕊は、蒂と互に表となり裡となつてみて、實を結ぶの根本と爲つて居る。亦、五箇の小さき點を攢めて雄蕊を生じ、雄蕊の尖に黄色なる蕊を生じて居る。梅杏海棠の雄蕊も、亦各々區別がある。梅は清瘦なるが宜しく、桃や杏は豐滿なるが宜しい。それは花の咲く時が同じくないからである。即ち梅は春のまだ寒い時に咲き、桃や杏は暖くなつてから咲くので、清瘦と豐滿との相違が有るのである。且つ又、白梅と紅梅とも各々同じくない。白梅は一層清瘦なるが宜しい。紅梅は白梅よりも少しく豐滿にするが宜しい。紅梅は白梅よりも豐滿にするが善い。云つても、紅い杏の花のやうになつてはならぬ。花がそれ／＼同じくないことは、先づ心にも見はれて居るのである。

畫根皮法

木花與草花不同更有根與皮之別。桃桐之皮、皴宜橫。松栝之皮、皴宜鱗。柏皮宜紐。梅皮宜蒼潤。杏皮宜紅紫。薇之皮宜光滑。榴皮宜枯瘦。山茶之皮宜青潤。臘梅之皮宜蒼潤。寫其根幹得其皮皴則木花之全體得矣。

【譯】木花と草花とは同じからず、更に根と皮との別有り。桃桐の皮は、皴は宜しく横にすべし。松栝の皮は、皴は宜しく鱗にすべし。柏皮は宜しく紐にすべし。梅皮は宜しく蒼潤なるべし。杏皮は宜しく紅紫なるべし。薇の皮は宜しく光滑なるべし。榴皮は宜しく枯瘦なるべし。山茶の皮は宜しく青潤なるべし。臘梅の皮は宜しく蒼潤なるべし。其根幹を寫し、其皮皴を得れば、則ち木花の全體得らる。

【註】栝、栝樹。○蒼潤、さびて且つ潤あること。○薇、上に恐らくは紫の字を脱するならん。紫の字重複す。

るが爲めに誤つて脱せしなるべし。紫薇は百日紅なり。一説に薇を讀んで蕃薇と爲せども、恐らくは非ならん。○光滑、ひかつてなめらかなること。○枯瘦、ひからびて瘦せて居ること。○青潤、色青くして潤澤あること。

【解】 木の花と草の花とは同じくないことは既に説いたが、更に根と皮とにも區別がある。桃や桐の皮の皴は横にするが宜しい。松や栝の皮の皴は、鱗のやうにするが宜しい。柏の皮は紐のやうにするが宜しい。梅の皮はさびて潤あるやうにするが宜しい。杏の皮は紅色を帯びた紫色にするが宜しい。紫薇の皮は光つて滑かなのが宜しい。石榴の皮は、ひからびて瘦せて居るが宜しい。山茶の皮は青くて潤あるやうにするが宜しい。臘梅の皮は、さびて潤あるやうにするが宜しい。其根もとや幹を寫し、其皮の皴をあらはすことが出来れば、木の花の全體は手に入つたのである。

畫 枝 訣

寫枝須審察花葉由枝生交加能掩映因枝以及根有如人四體枝幹似其身木花枝宜老自與草花別皮色與枝形前已具法則意欲傳其心今再申以訣

【譯】 枝を寫すには須く審かに察すべし、花葉は枝に由りて生ず。交加して能く掩映し、枝に因りて以て根に及ぶ。人の四體の如き有り、枝幹は其身に似たり。木花の枝は宜しく老ゆべし、自ら草花と別なり。皮色と枝形とは、前に已に法則を具へたり。意其心を傳へんと欲し、今再び申ぬるに訣を以てす。

【註】 交加、こもく加ふ。或は枝の上に又枝を書き加へたり、或は葉を書き加へたり、花を書き加へたりするをいふ。○掩映、掩蔽と同意、おほひかざすこと。○四體、四肢なり。兩手兩足をいふ。○枝幹、恐らくは根幹に作るべきならん。○申、かさね。くりかへすこと。

【解】 枝を寫すには詳細に省察することを要する。花や葉は枝から出て居る。交々書き加へて能くおほひかざすやうにし、枝から根に及ぶ。枝は人の四肢の如くであり、幹はその胸腹部に似て居る。木の花の枝は老いて居るが宜しい。草の花の枝とは違つて居る。皮の色と枝の形とは、前に已に法則を述べて置いた。われは其心を傳へたいと思つて、今再び重ねてこの訣を説くのである。

畫 花 訣

枝帶花所生枝葉花爲主寫花若未稱枝葉妙無補形先得妖嬈枝葉亦增嬌

設色須輕盈嬌容自若生常含欲語態自有動人情是以徐黃筆千秋負令名

【譯】 枝葉は花の生ずる所、枝葉は花を主と爲す。花を寫して若し未だ稱はずんば、枝葉妙なるも補無からん。形先づ妖嬈たるを得ば、枝葉も亦嬌を増さん。設色は須く輕盈なるべし、嬌容自ら生けるが若くならん。常に語らんと欲する態を含まば、自ら人を動かす情有らん。是を以て徐黃の筆、千秋、令名を負ふ。

【註】 妖嬈、うつくしくたをやかなる貌。○嬌、なまめかしきこと。○輕盈、儀態纖弱なるをいふ。しなやかなること。○嬌容、媚を含みたるすがた。

【解】 枝や葉は花の出る所であり、枝や葉は花を主として居る。花を寫すことが若し釣り合はぬときは、枝や葉がいかにか巧妙であつても何の益にも立たぬ。花の形が美しくたをやかに寫し出されたならば、枝や葉もなまめかしさを増すであらう。彩色するには、しなやかなることを要する。媚を含める美しい容が、生けるが如く畫面にあらはれるであらう。常に語らんとする態度を含むときは、自然に人を感動する情趣がある。それ故に徐熙黃筌の畫は、千歳の後まで名聲が高いのである。

畫 葉 訣

有花必有葉寫葉亦須佳掩映須藏幹翻翻亦似花動搖風露態反正淺深加樹花葉不一更有四時別春夏多數榮秋冬耐霜雪獨有花中梅開時不見葉

【譯】 花有れば必ず葉有り、葉を寫すには亦須く佳なるべし。掩映して須く幹を藏すべし。翻翻として亦花に似たり。動搖す風露の態、反正に淺深加はる。樹花葉は一ならず、更に四時の別有り。春夏には多く數榮し、秋冬には霜雪に耐ふ。獨り花中の梅有り、開く時に葉を見ず。

【註】 反正淺深加、反は裏、正は表。淺深は濃淡なり。正面の葉は色を濃くし、裏面の葉は色を淡くするなり。○四時別、別の字、原本には誤つて則に作る。○數榮、ここにては葉の盛に茂れるをいふ。

【解】 花が有れば必ず葉がある。葉を寫すことも美しくなければならぬ。おほひかさして幹をかくすことを要する。翻翻として居るさまは花に似て居る。風に吹かれ露を含んで動搖して居る態を寫し出し、色の濃淡を以て葉の反正をあらはす。樹の花や葉はそれ／＼一では無く、又、春夏秋冬の四時によつても區別がある。春夏には多くの木の葉が盛に伸び茂つて居る。秋冬には霜や雪に耐へて居る者も有る。ただ梅のみが花の咲く時に葉が出てゐない。

畫蕊蒂訣

寫花具全體。外蒂內心蕊。心蕊從蒂生。內外相表裡。含香由心吐。結實從蒂始。其花之反正。心蒂各所宜。心必由乎瓣。蒂必附于枝。花有此二者。如人之鬚眉。

【譯】花を寫して全體を具ふるは、外は蒂にして内は心蕊。心蕊は蒂より生じ、内外相表裡す。香を含んで心に由つて吐き、實を結ぶは蒂より始まる。其花の反正、心蒂各々宜しき所あり。心は必ず瓣に由り、蒂は必ず枝に附く。花に此二者あるは、人の鬚眉の如し。

【註】其花之反正、心蒂各所宜、花には正面なる者と背面なる者とあり、それに随つ心と蒂とを書き入るるに、各々宜しき所あるなり。正面なる者は心見ゆれども蒂見えず、背面なる者は蒂見ゆれども心見えざるの類なり。

【解】花を寫して全體を具備するには、外には蒂があり、内には心蕊が有る。心蕊は蒂から出て居つて、内と外と互に表となり裏となつて居る。花の中に含まれて居る香は心に由つて吐き出され、實を結ぶのは蒂から始まる。花の背面なると正面なるに因つて、心と蒂とを書き入れるに各々適當なる仕方がある。心は必ず瓣に由つて居り、蒂は必ず枝に附いて居る。花に心と蒂とが有るのは、ちやうど人に鬚と眉とが有るやうなものである。

畫法源流翎毛

詩人六義多識鳥獸草木之名。月令四時亦記語默榮枯之候。然則花卉與翎毛既同見於詩禮。自宜兼善丹青矣。花卉源流先編草本已附蟲蝶。今於木本合載翎毛。考唐宋名流皆花卉翎毛交善。安得重編再錄。至若翎毛爲類不同。薛鶴郭鶴已見稱於古人。後此豈無。當以一體擅長者哉。如薛稷之後馮紹政。嗣廉程凝。陶成俱善畫鶴。郭乾暉。乾祐之後姜皎。鍾隱。李猷。李德茂俱善畫鷹鶴。邊鸞善孔雀。王凝善鸚鵡。李端牛戩善鳩。陳珩善鵲。艾宣。傅文用。馮君道善鶴。鶻。范正夫。趙孝穎善鶻。鶻。夏奕善鸚鵡。黃筌善錦鷄。鴛鴦。黃居寀善鶻。山鷓。吳元瑜善紫燕。黃鸝。僧惠崇善鷗鷺。闕生善寒鴉。于錫。史瓊善雉。崔慤。陳直躬。張涇。胡奇。晁悅之。趙士雷。僧法常善雁。梅行思善鬪鷄。李察。張昱。毋感之。楊祁善鷄。史道碩。崔白。滕昌祐。曹訪善鷺。高燾善眠鴨。浮雁。魯宗貴善雞。雛鴨。黃。唐垓善野禽。強頴。陳自然。周混善水禽。王曉善鳴禽。此俱歷代名家。或花卉中安

置、崑善一長、或衆鳥中描寫、尤稱最妙。至若山禽水鳥、諸方產畜不同、錦羽翠翎、四季毛色各別、以及飛鳴宿食之態、嘴翅尾爪之形、圖中之未悉載者、又當以意求之耳。

【譯】 詩人の六義には、多く鳥獸草木の名を識り、月令の四時にも、亦、語默榮枯の候を記す。然れば則ち花卉と翎毛とは、既に同じく詩禮に見ゆ。自ら宜しく丹青を兼ね善くすべし。花卉の源流は、先づ草本を編し、已に蟲蝶を附けたり。今、木本に於て、合はせて翎毛を載す。唐宋の名流を考ふるに、皆、花卉翎毛交々善くす。安んぞ重ねて編し再び録するを得ん。翎毛の若さに至りては、類たること同じからず。薛鶴・郭鶴は、已に古人に稱せらる。此れより後、豈に専ら一體を以て長を擅にする者無からんや。薛稷の後の若き、馮紹政・副廉・程凝・陶成は、俱に善く鶴を畫く。郭乾暉・乾祐の後、姜政・鍾隱・李猷・李德茂は、俱に善く鷹鶴を畫く。邊鸞は孔雀を善くす。王凝は鸚鵡を善くす。李端・牛勣は鳩を善くす。陳珩は鶴を善くす。艾宜・傅文用・馮君道は、鸚鵡を善くす。范正夫・趙孝類は、鸚鵡を善くす。夏奕は鶻物を善くす。黃筌は錦鶴・鴛鴦を善くす。黃居宥は鸚鵡・山鷓を善くす。吳元瑜は紫燕・黃鸝を善くす。僧惠崇は鷗鷺を善くす。關生は寒鴉を善くす。于錫・史瓊は雉を善くす。崔慤・陳直躬・張涇・胡奇・見悅之・趙士雷・僧法常は雁を善くす。梅行思は鸚鵡を善くす。李察・張昱・田成之・楊祁は鷄を善くす。史道碩・崔白・滕昌祐・曹訪は鶻を善くす。高翥は眠鴨・浮雁を善くす。魯宗貴は鸚鵡・鴨黃を善くす。唐垓は野禽を善くす。強穎・陳自然・周澗は水禽を善くす。王曉は鳴禽を善くす。

此れ俱に歴代の名家にして、或は花卉の中に安置して、崑ら一長を善くし、或は衆鳥の中に描寫して、尤も最妙と稱せらる。山禽水鳥の若さに至りては、諸方の產畜、同じからず。錦羽翠翎、四季の毛色各々別なり。以て飛鳴宿食の態、嘴翅尾爪の形に及ぶまで、圖中の未だ悉く載せざる者は、又當に意を以て之を求むべきのみ。【註】 詩人六義、毛詩の序に、詩に六義有り、一に曰く風、二に曰く賦、三に曰く比、四に曰く興、五に曰く雅、六に曰く頌、とあり。これ詩の六義なり。今は詩經の意に用ふ。○月令、禮記の篇の名にして、春夏秋冬十二箇月の自然の變化及び草木鳥獸の榮枯動靜等を載せたり。○語默榮枯、語默は禽獸に就いて言ひ、榮枯は草木に就いて言ふ。○詩禮、詩經と禮記。○薛鶴、薛稷の畫きたる鶴。○郭鶴、郭乾暉の畫きたる鷹。○馮紹政、一に昭正又は紹正に作る。唐の人、開元中、少府監・戶部侍郎たり。諸禽は其形態を盡し、龍水は妙と稱せらる。間々牡丹を畫く。○副廉、唐の人、性野にして、花鳥に工なり。鶴を畫くに薛稷を師とし、深く其妙を得たり。○程凝、五代の人、鶴竹を善くし、長遠の水を兼ぬ。○陶成、字は懋學、雲湖山人と號す。明の寶應の人。成化辛卯、鄉薦を領す。人物山水花鳥、宋人に逼肖す。畫工が方に梅を作るを見、其法を熟視し、爲めに數筆を添ふ。工曰く、吾、及ばざるなりと。尤も鈎勒を善くし、竹・芙蓉は神品に入る。某氏の圖に寓し、爲めに芙蓉數十紙を繪きて、以て主人に贈る。主人、銀杯を出して以て贈る。成怒り、畫を索めて盡く之を焚く。幼にして師に従ひ、師の母を見て即ち之を圖す。次いで其女を見、又、之を圖す。皆、眞に逼る。師怒りて逐ひ去る。師の母歿するに及びて、神を傳ふる者、皆、遠ばず。卒に其の圖畫する所を用ふ。蓋し其性至巧なり。嘗て銀工が器を製するを見、之に倣ふ。即ち其右に出づ。人と爲り抗直不羈にして、米南宮・郭忠恕の風

有り。而して豪蕩なること之に過ぐ。詩に工に、篆隸を善くす。○姜皎、唐の秦州上邽の人、開元中、官、秘書監に至り、楚國公に封ぜらる。鷹鳥を善くす。玄宗、其忠力、朕が履を戴き、危険を蹈めども變する無しと稱し、且つ漢昭の霍光に任じ、魏祖の程昱を用ふるを以て、以て其功を識す。○李猷、宋の河内の人、鷹鷂に長じ、精神態度、曲に其妙を盡す。○李德茂、宋の人、李迪の子、淳祐の待詔たり、能く其業を世く。○王凝、宋の人、畫院の待詔たり。花竹翎毛、頗る生意を得たり。兼ねて鸚鵡・獅猫を善くす。山林草野の能くする所に非ず、兼ねて富貴の態度を取る、自ら是れ一格なり。○李端、宋の汴の人、宣和の畫院の待詔たり。紹興の間、金帯を賜はる。梨花・鷓子を作るに法を得たり。高宗、之を受す。○牛嶷、宋の人、字は愛蔭、河南の人、道士なり。貌古り性野にして、人事を修めず、財賄を輕んじ、信義を重んじ、酒を嗜み自ら樂しむ。劉永年の柘棘を師とし、筆墨豪放にして、長ずる所は破毛の禽、寒雉、野鴨なり。肆間に於て飲むこと一斗に至る毎に、紙一番を索め、畫きて以て質と爲す。醒めて後必ず購ひて之を毀去る。○陳玘、宋の人、字は行用、此山と號す。陳容の弟なり。仕へて朝請郎たり。龍水及び墨竹・枯荷・折葦を善くし、蟲魚蟹鵝は、極めて生趣有り。○傅文用、宋の開封の人、俗、三翁を以て之を自目す。鸚鵡は能く四時を分ち、毛羽、黃筍の風概有り。○馮君道、元の錢塘の人、花鳥翎毛を善くし、毎に鸚鵡を養ひ、以て畫筆に資す。○鸚鵡、本、二鳥の名なれども、今多く合して一と爲す。うづら。○范正夫、字は子立、宋の穎昌の人、文正公仲淹の諸孫なり。水墨の雜畫に長じ、鸚鵡・竹石の如き、標格高秀なり。後、鳳翔の令に知たり。郷に還りて兵に死せり。○趙孝頤、宋の人、字は師純、端獻魏王の第八子、仕へて慶德軍節度使に至る。翰墨之餘、雅と花鳥を善くす。陂湖を描寫するに、

物趣之を遐想に得、目撃して親しく之に寓する者に合する有り。○夏奕、宋の人、翎毛に工なり。○鴻鸞、水鳥の名。鴛鴦に似て稍大なり。羽五彩にして紫色多し。故に又、紫鴛鴦と名づく。頭に纒有り、尾羽直立して船の柁の如し。○鸚鵡、はと。○山鷓、鳩の種類の鳥の名。○僧惠崇、宋の建陽の人、一に淮南の人と曰ふ。水鳥に工に、善く寒汀烟渚の小景を爲る。瀟洒虛曠の狀、世謂ふ、人の到り難き所なりと。書を善くし詩に工にして、九僧の一と爲す。集有り。○關生、宋の人、何處の人なるか詳かならず。古木、雪景、梅花、寒鴉、凍鶴、深く其意を得たり。○史瓊、五代の人、雉兔竹石を善くし、雪景を善くす。○陳直躬、宋の人、陳偕の子、其學を世ぎ、兼ねて善く雁を畫く。○張逵、一に張經に作る。宋の姑蘇の人、雜畫を善くし、尤も傳摸に精し。翎毛蘆雁、俗ならず。米芾に稱せらる。○胡奇、宋の長安の人、蘆雁、觀る可し。○晁悅之、宋の人、字は以道、司馬溫公の人と爲りを慕ひ、景迂と號す。晁補之の弟なり。元豐壬戌の進士、蘇軾、著述科を以て之を薦む。建炎の初、徽猷閣待制に終る。山水・寒林・雪雁を善くし、詩に工なり。嘉祐己亥生れ、建炎己酉卒す。年七十一。景迂生集を著はす。○趙士雷、字は公震、宋の宗室にして仕へて襄州觀察使に至る。溪塘飛鳥、詩人の思致有り。花竹を作るに、多く風雪荒寒の中に在りて筆を落し、畫家と背馳す。山水人物、清雅にして愛す可し。○僧法常、宋の人、牧溪と號す。龍虎、猿鶴、蘆雁、山水、人物、俱に意に隨つて墨を點じて之を成す。性英爽にして酷だ酒を嗜み、寒暑風雨常に醉ふ。醉へば即ち熟寢す。覺むれば即ち朗吟す。○梅行思、一に梅再思に作る。南唐の江夏の人、翰林待詔と爲る。鬪鷄神絶にして、號して梅家鷄と曰ふ。兼ねて人物に工なり。○李察、唐の人、善く鷄を畫く。○張昱、唐の人、善く鷄を畫く。○田咸之、宋の江南の人、鷄を畫

き、毛色明潤、瞻視清爽にして、大に生意有り。○楊祁、宋の彭州崇寧の人、花鳥及び竹を善くし、又、鷄を畫くに工なり。○史道頌、晉の人、荀最・衛協を師とし、能く其似を得たり。善く故實を繪き、人物及び鷄に工なり。其兄弟四人、皆、畫を善くするを以て名を得たり。○曹訪、宋の人、鷄を畫き、徐熙を學ぶ。○高燕、宋の人、字は公廣、三樂居士と號す。河州の人、小景は自ら一家を成し、清思、人に可にして、工氣を一洗す。眠鴨・浮雁・衰柳・枯枿、最も珍絶と爲す。篆隸飛白、一一、妙に造る。○魯宗貴、宋の錢塘の人、紹定の畫院の待詔たり。花竹・鳥獸・菓石、描染して極めて佳なり。尤も寫生に長ず。鷄雛・鴨黃、最も生意有り。○鴨黃、鴨の雛。○唐垓、五代の人、野禽・水族・生菓・鳥蟲・草木、咸、精妙と稱せらる。○強頌、唐の宋、水鳥を善くす。○陳自然、宋の人、畫佛を以て京師に名あり。秋水寒禽も亦、觀る可し。○錦羽翠翎、鳥の羽毛の美麗なるを形容するなり。

【解】 詩經を讀むときは、多く鳥獸草木の名を識り、禮記の月令篇にも、四時に於ける鳥獸の動靜や草木の榮枯の季節を記載してある。して見ると、花卉と翎毛とは、既に同じく詩經禮記に出て居るのである。さすれば、繪畫に於ても花卉と翎毛とを兼ね善くすべきである。花卉の源流に就いては、先づ草本を編輯して、それに蟲や蝶を附載しておいたが、今、木本に於て、合はせて翎毛を載せることにした。唐宋の諸名家を考へて見るに、皆、花卉と翎毛とを交々善くして居るので、重ねて編輯し再び記録

するに及ばぬのである。翎毛に至つては、其種類が少くない。薛稷の鶴・郭乾暉の鷓は、已に古人に稱贊されて居る。それより以後にも、専ら一種類を以て特に長じて居た人が無いのでは無い。薛稷の後には、馮紹政・荆廉・程凝・陶成は、いづれも善く鷓を畫いた。邊た、郭乾暉・乾祐の後には、姜皎・鍾隱・李猷・李德茂は、いづれも善く鷹鷂を畫いた。邊鷺は善く孔雀を畫いた。王凝は善く鸚鵡を畫いた。李端・牛戩は善く鳩を畫いた。陳珩は善く鵲を畫いた。艾宣・傅文用・馮君道は、善く鷓鴣を畫いた。范正夫・趙孝穎は、善く鵝を畫いた。夏奕は善く鸚鵡を畫いた。黃筌は善く錦鷄・鷓鴣を畫いた。黃居寀は、善く鷓鴣・山鷓を畫いた。吳元瑜は善く紫燕・黃鸝を畫いた。僧惠崇は善く鷓と鷺を畫いた。闕生は善く寒鴉を畫いた。于錫・史瓊は善く雉を畫いた。崔慤・陳直躬・張涇・胡奇・晁悅之・趙士雷・僧法常は、善く雁を畫いた。梅行思は善く鬪鷄を畫いた。李察・張昱・毋感之・楊祁は善く鷄を畫いた。史道頌・崔白・滕昌祐・曹訪は、善く鷄を畫いた。高燕は眠れる鴨や水面に浮べる雁を善く畫いた。魯宗貴は善く雞の雛や鴨の雛を畫いた。唐垓は善く野鳥を畫いた。強頌・陳自然・周滉は善く水鳥を畫いた。王曉は善く鳴禽を畫いた。これ等はいづれも歴代の名家であり、或は花卉の中に置いて、専ら一の

長所を發揮し、或は衆くの鳥の中に寫して、すぐれて絶妙と稱せられたのである。山禽・水鳥の若きは、諸方に産する所畜はれる所の者が同じく無く、その美しい羽毛の色は春夏秋冬の季節によつて異なつて居り、又、飛んだり鳴いたり時に宿つたり物を食べたりする態度、嘴・翅・尾羽の形状などは、圖中に未だ悉く載せては無いのであるが、それ等の類は、又、各自に探求さるべきである。

畫翎毛用筆次第法

畫鳥先從嘴之上脰一長筆起、次補完上脰、再畫下脰一長筆、又次補完下脰。點睛須對嘴之呀口處爲準、其次畫頭與腦、又次畫背上披簍毛、及翅膊、再則畫胸并肚子至尾、末後補腿樁及爪、總之鳥形不離卵相、其法具見後訣。

【譯】鳥を畫くには、先づ嘴の上脰の一長筆より起し、次に上脰を補完す。再び下脰の一長筆を畫き、又次に下脰を補完す。睛を點するには、須く嘴の呀口の處に對するを準と爲すべし。其次に頭と腦とを畫く。又次に背上の披簍毛及び翅膊を畫く。再び則ち胸并に肚子を畫きて尾に至る。末後に腿樁及び爪を畫く。之を總ぶるに鳥の形は卵相を離れず。其法は具に後の訣に見ゆ。

【註】上脰、うはあご。○下脰、したあご。○呀口處、口を開く口もと。上下の嘴の接合點をいふ。○披簍毛、みのけ。○翅膊、つばさ。○肚子、腹。○末後、最後。○腿樁、もも。樁を原本に樁に作れるは誤なり。

【解】鳥を畫くには、先づ嘴の上脰の一本の長い線から書き始める。次に上の短い横線を引きて上脰を完成する。次に下脰の一本の長い線を引き、又次に下の短い横線を書き入れて下脰を完成する。次に睛を點するのであるが、それは嘴の上下の接合點の處に對するのを標準とすべきである。其次には頭と腦とを畫く。又次に背上の披簍毛を畫き、それから翅膊を畫く。其次に胸を畫き、肚子を畫き、尾を畫く。最後に、股、足指、爪を畫く。總て鳥の形は卵の相を離れない者である。其法は具に後の歌訣に述べてある。

畫翎毛訣

翎毛先畫嘴、眼照上唇、安留眼描頭額、接腮寫背肩、半環大小點、破鏡短長尖、細細梢翎出、徐徐小尾填、羽毛翅脊後、胸肚腿腕前、臨了纔添脚、踏枝或展拳。

【譯】翎毛は先づ嘴を畫き、眼は上唇に照らして安んず。眼を留めて頭額を畫き、腮に接して背肩を寫す。半

環大小の點、破鏡短長の尖。細細に梢翎出で、徐徐に小尾填む。羽毛は翅脊の後、胸肚は腿腕の前。臨し了りて纒に脚を添へ、枝を踏み或は展べ拳む。

【註】上唇、上唇をいふ。眼は上下の嘴の接合點より少しく上部に置くなり。○半環大小點、破鏡短長尖、半圓形の大小の點や片われ月の如き或は短く或は長き尖りたる點を以て描く。○梢翎、羽毛のさき。小さき羽をいふ。○羽毛翅脊後、胸肚腿腕前、俗に家禽の胃を肺といふ。翅脊を畫きたる後に羽毛を描き、腿腕を畫く前に胸肚を畫くをいふ。胸肚は鳥の下邊の前半身をいひ、腿腕は後半身をいふ。○展、脚の指をのばすこと。○拳、脚の指をかがめること。○此訣は鳥を畫く順序を示したるものにして、後に畫翎毛起手式に圖を以て一説明されたり。参照せよ。

【解】鳥を畫くには先づ嘴を畫き、眼は上唇の位置を見計らつて書き入れる。眼を書き入れてから頭や額を畫き、腮に接して背や肩を寫す。半圓形の或は大きく或は小さき點や、破れたる鏡の如き或は短く或は長き尖りたる點を以てそれを描く。綿密に羽毛の梢を書き、徐徐に小さき尾を書く。翅や脊を畫きたる後に羽毛を描き、腿腕を畫く前に胸や肚を描く。全體を臨寫し了つて始めて脚を添へるのであるが、脚は或は枝にとまつたり、或は足を伸ばしたり、或は足を拳めたりして居る。

畫鳥全訣

首尾翅足點睛及飛鳴飲啄各勢

須識鳥全身由來本卵生卵形添首尾翅足漸相增飛揚勢在翅舒翮捷且輕昂首須開口似聞枝上聲歇枝在安足穩踏靜不驚欲飛先動尾尾動便高昇得其開展勢跳枝如不停此爲全身訣能兼衆鳥形更有點睛法尤能傳其神飲者如欲下食者如欲爭怒者如欲鬪喜者如欲鳴雙棲與上下須得顧眄情亦如人寫肖全在點雙睛點睛貴得法形采即如眞微妙各有理方足傳古今

【譯】須く識るべし鳥の全身は、由來卵に本づきて生ずるを。卵形に首尾を添へ、翅足漸く相増す。飛揚の勢は翅に在り、翮を舒ぶること捷く且つ輕し。首を昂ぐれば須く口を開くべし、枝上の聲を聞くに似たり。枝に歇めるは足を安んずるに在り、穩かに踏みて靜にして驚かず。飛ばんと欲すれば先づ尾を動かす、尾動けば便ち高く昇る。其開展の勢を得れば、枝に跳ること停まらざるが如し。此れを全身の訣と爲す、能く衆鳥の形を兼ぬ。更に點睛の法有り、尤も能く其神を傳ふ。飲む者は下らんと欲するが如く、食ふ者は争はんと欲するが如し。怒る者は鬪はんと欲するが如く、喜ぶ者は鳴かんと欲するが如し。雙棲と上下と、須く顧眄の情を得べし。亦人の寫肖の如く、全く雙睛を點するに在り。睛を點すること法を得るを貴ぶ、形采即ち眞なるが如し。微妙にして各々理有り、方に古今に傳ふるに足る。

【註】 翻、羽の莖、はねのもと。○雙棲、二羽並んで木にとまること。○寫肖、肖像畫。○形采、形狀風采。

【解】 鳥の全身は元來卵を本として出来たものであることを識るべきである。卵の形に首と尾とを添へ、翅と足とが漸次に増したのである。鳥を畫くには、さういふ積りで書くべきである。鳥が飛び揚る勢は翅に在る。翻を舒ばすことが迅速にして且つ輕快である。首を昂げるときには口を開くことを要する。そして枝の上で鳴いて居る聲が聞えるが如くにすべきである。枝にとまつて休んで居る鳥は、足を枝の上に落ちつかせるやうにする。穩かに枝を踏んで、靜かにして驚かないやうにする。飛ばうとするときには、先づ尾を動かすのである。尾が動くときには高く昇るのである。其の開き展ぶる勢を得るときは、枝の上で跳びまはつて、停止することの無いやうにする。これが鳥の全身を畫く秘訣である。多くの種類の鳥は皆かうして書くのである。更に睛を點ずる法がある。尤も其精神を傳へることが出来る。水を飲んで居る者は下らうとするやうであり、物を啄んで食へて居る者は争はうとするやうであり、怒つて居る者は鬨はうとするやうであり、喜んで居る者は鳴かうとするやうである。二羽並んで木にとまつて居る者と、上と下とに在る者とは、互に見合つて居る氣分を得ることを要する。亦人の肖像畫と同じく、全く二つの眼睛を點ずることが大切である。眼睛を點ずるには法に叶ふことを貴ぶ。さうすると形狀風采が生きて居るやうになる。これ等の事は皆精微玄妙にして、各々道理有ることであり、斯くて始めて古今に傳ふるに足る名畫が出来るのである。

畫 宿 鳥 訣

凡鳥之各狀、飛鳴與飲啄。此則人所知、但未知其宿。枝頭安宿鳥。必須暝其目。其目下掩上、禽之異乎畜。嘴插入翼中。毛腹藏雙足。因稽宿鳥情。證之古諺語。鷄宿必上距、鴨宿必下嘴、下嘴味插翼上、距縮一腿。雖言鷄鴨性、亦具衆禽理。作畫所當知、一切類推此。

【譯】 凡そ鳥の各狀、飛鳴と飲啄とは、此れは則ち人の知る所なれども、但だ其宿を知らず。枝頭に宿鳥を安んずるには、必ず須く其目を暝すべし。其目は下、上を掩ふ、禽の畜に異なるなり。嘴は、插みて翼中に入れ、毛腹に雙足を藏む。因つて宿鳥の情を稽へ、之を古諺の語に證せん。鷄の宿するには必ず距を上にし、鴨の宿するには必ず嘴を下にす。嘴を下にすれば味を翼に、插み、距を上すれば一腿を縮むと。鷄鴨の性と云ふと雖も、亦衆禽の理を具ふ。畫を作るに當に知るべき所、一切此れを類推せよ。

【註】宿鳥、ねとり。○眼、目をつぶること。○畜、家畜、ここには獸をいふ。○距、鶏・雉などの趾爪。○味、鳥の口。喙。

【解】凡そ鳥の各種の情態の中で、飛んだり鳴いたりすること、水を飲んだり物を啄んだりするのは、人が誰でも知つて居る事であるが、但し其の宿て居る情態は知られてゐないのである。枝の上に宿鳥を置くには、必ず目を瞑らせることを要する。其目は下まぶたが上まぶたを掩うて居る。これは鳥が獸と異なつて居るところである。嘴は足の中に挿し込み、兩足はちめて腹の毛の中に藏めて居る。因つて宿鳥の情態を考へ、それを古の諺によつて證明しよう。鶏が宿するには必ず距を上にし、鴨が宿するには必ず嘴を下にする。嘴を下にするときは味を翼の中に挿し込み、距を上にするときは一本の脚を縮めて居ると曰はれて居る。これは鶏や鴨の性質であるけれども、亦衆くの禽の理法を具へて居る。畫を作るに就いて知つて置くべきことであり、其他一切これによつて類推すべきである。

畫鳥須分二種嘴尾長短訣

畫鳥分二種。山禽與水禽。山禽尾必長。高飛羽翻輕。水禽尾自短。入水堪浮沈。須各得其性。方可圖其形。尾長必短嘴。善鳴易高舉。尾短嘴必長。魚蝦搜水底。鶴鷺則腿長。鷗鳧亦短腿。雖俱屬水禽。亦須分別此。山禽處林木。毛羽具五色。鸞鳳與錦鷄。輝燦鋪丹碧。水禽浴澄波。其體多清潔。鳧雁色同蒼。鷗鷺色共白。惟有雙鴛鴦。形須分雌雄。雌者具五色。雄與野鷺同。翠鳥多光彩。羽毛皆青葱。翠色帶青紫。嘴爪丹砂紅。羨此二禽色。獨冠水鳥中。

【譯】鳥を畫くには二種に分つ、山禽と水禽と。山禽は尾必ず長く、高く飛びて羽翻輕し。水禽は自ら尾短く、水に入りて浮沈するに堪ふ。須く各其性を得べし、方に其形を圖す可し。尾長きは必ず短嘴、善く鳴きて高く舉り易し。尾短きは嘴必ず長く、魚蝦を水底に搜る。鶴鷺は則ち腿長く、鷗鳧は亦短腿。俱に水禽に屬すと雖も、亦須く此れを分別すべし。山禽は林木に處り、毛羽は五色を具ふ。鸞鳳と錦鷄とは、輝燦として丹碧を鋪く。水禽は澄波に浴し、其體多くは清潔なり。鳧雁は色同じく蒼く、鷗鷺は色共に白し。惟だ雙鴛鴦有り、形は須く雌雄を分つべし。雌なる者は五色を具へ、雄は野鷺と同じ。翠鳥は光彩多く、羽毛皆青葱。翠色にして青紫を帯び、嘴爪丹砂のごとく紅なり。羨む此二禽の色、獨り水鳥の中に冠たるを。

【註】 腿、脛と股との總稱。○鶯、鳳凰の一種。○輝燦、はなやかに美しき形容。○鋪丹碧、赤き色や碧き色などの美しき色彩あるをいふ。○野鶯、かも。○翠鳥、翡翠。○青葱、青き色。

【解】 鳥を畫くには山禽と水禽との二種に分ける。山禽は、尾は必ず長く、高く飛びあがつて羽翮は輕快である。水禽は、尾が短くて、水中に入つて浮いたり沈んだりするに都合よくなつて居る。それ／＼其天性を知ることをする、斯くて始めて其形を畫くことが出来る。尾の長い者は必ず嘴が短く、善く鳴いて高く飛び舉り易い。尾の短い者は必ず嘴が長く、魚や蝦を水の底に捜すことが出来る。鶴と鶯とは腿が長く、鷗や鳧は腿が短い。いづれも水禽であるけれども、此れを區別しなければならぬ。山禽は林の中に處り、羽毛には青黄赤白黒の五色を具備して居る。鶯・鳳凰・錦鶏は、丹い色・碧い色など種々なる色彩を具へて居つて、ひかりかがやくばかりに美しい。水禽は澄みたる波を浴びるので、その體は多くは清潔である。鳧や雁は色が同じく蒼く、鷗や鶯は色がいづれも白い。二羽の鴛鴦の形は、雌と雄とを區別することを要する。雌は五色を具備して居るが、雄は野鶯と同じい。(ここには鴛鴦の雌が雄よりも美しくいやうに書いてあるが、これは誤であらう。)翠鳥は色彩多く、羽毛は皆青葱色で

あり、翠色に青紫を帯びて居り、嘴や爪は丹砂の如く紅である。鴛鴦と翠鳥と二つの色彩が、衆くの水鳥の中で最も優れて居る。

木本花頭起手式 有尖缺大 小之異

木本花頭起手式（木の花の書きかた）
尖缺大小の異有り。（花瓣に尖りたると缺けたると、大きいと小さいとの相違がある）
五瓣花頭（五つのはなびらある花）
桃花
杏花（あんずの花）

五瓣



桃花

杏花

花頭

梨花
金糸桃



梨花

金糸桃

大瓣八九瓣花頭（大きいはなびら、八九枚のはなびらある花）
白き者は玉蘭と爲し、紫なる者は辛夷と爲す。
山茶

大 瓣 八



白者爲玉蘭
紫者爲辛夷



山茶

茉莉附けたり葉
梔子（くちなし）

九 瓣 花 頭



茉莉
附葉



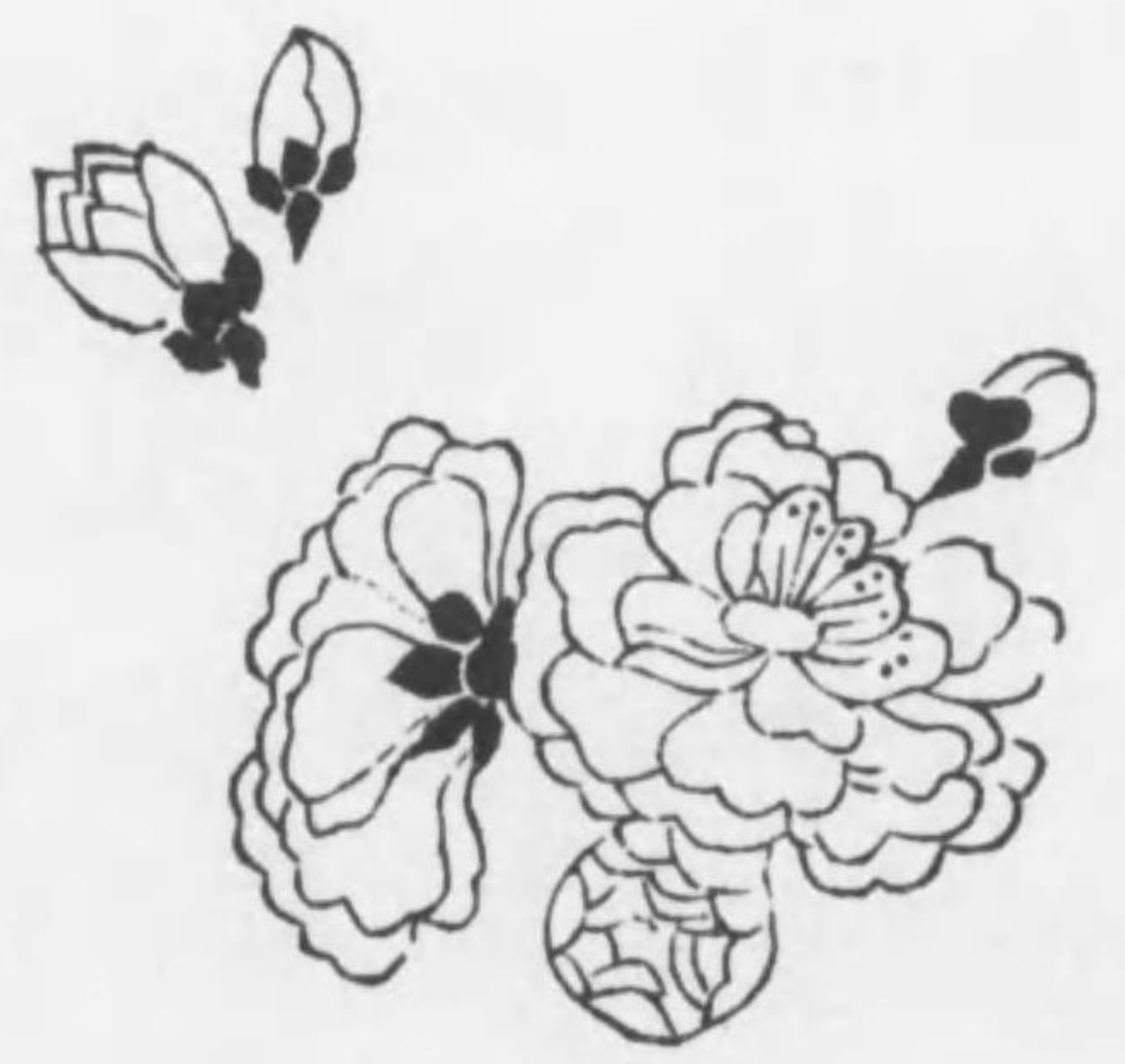
梔子

多瓣花頭(はなびら多き花)
海棠
碧桃(白き桃)

多瓣



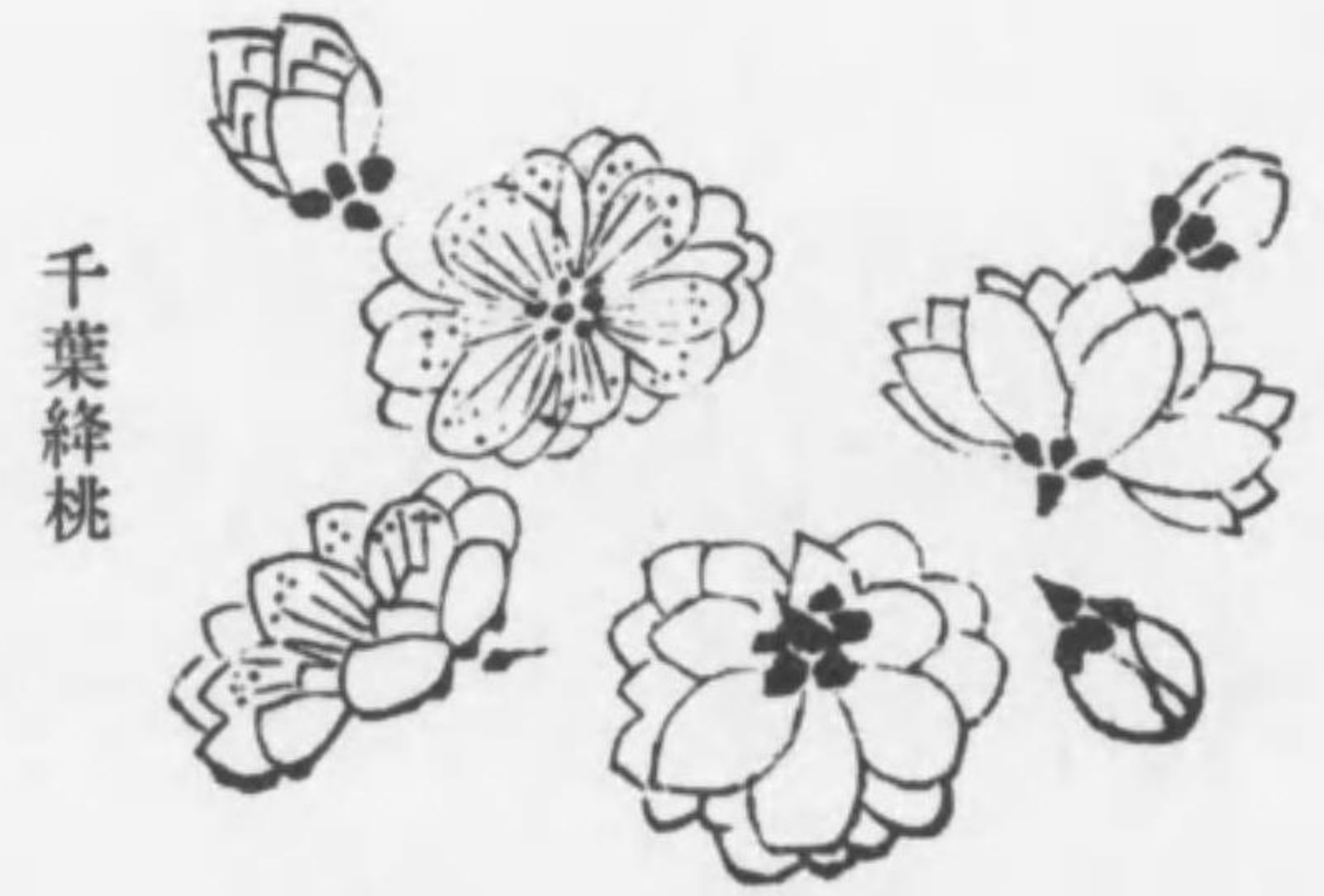
海棠



碧桃

千葉絳桃(八重の赤き桃)
千葉榴花(八重の石榴の花)

花頭



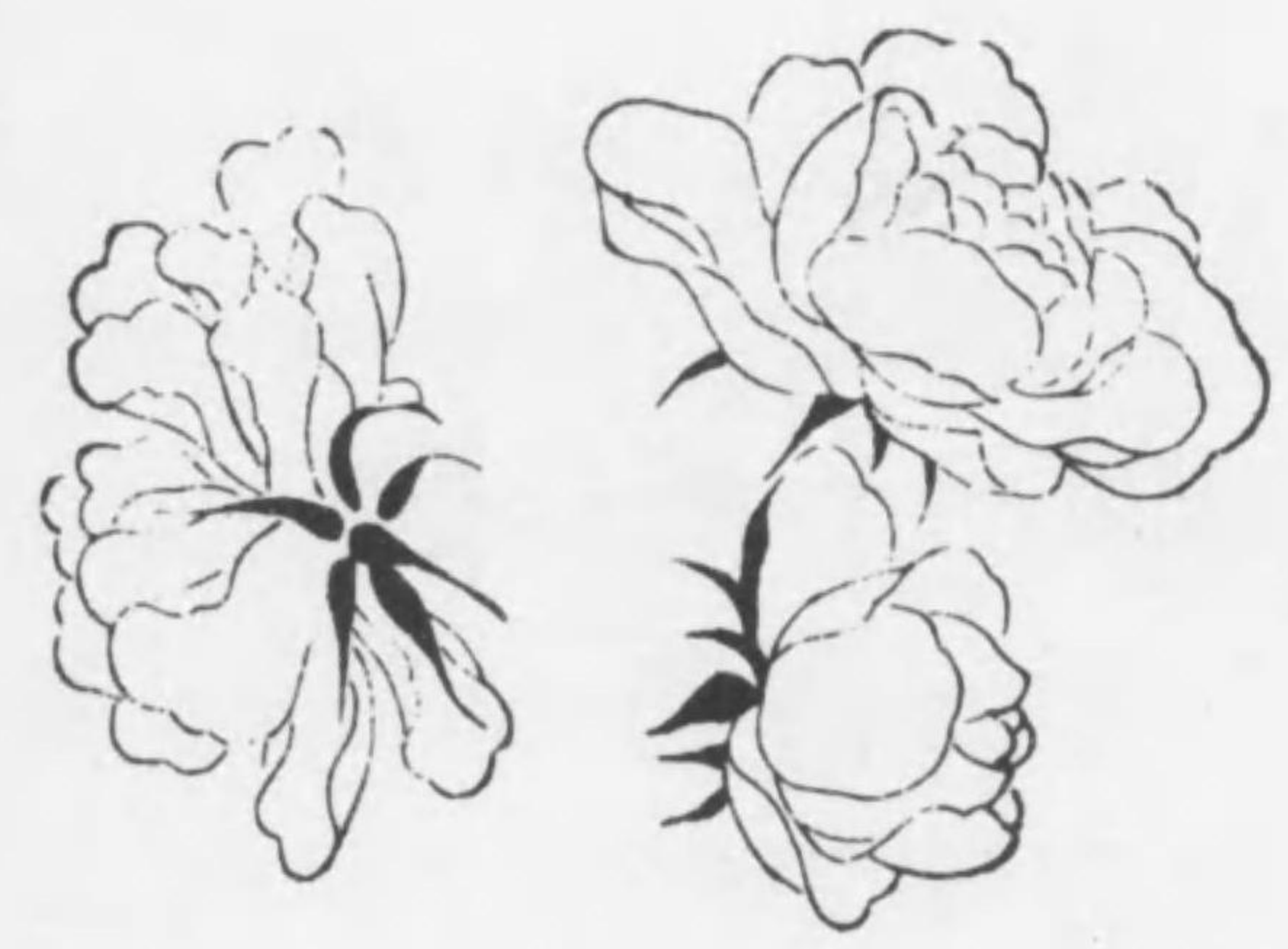
千葉絳桃



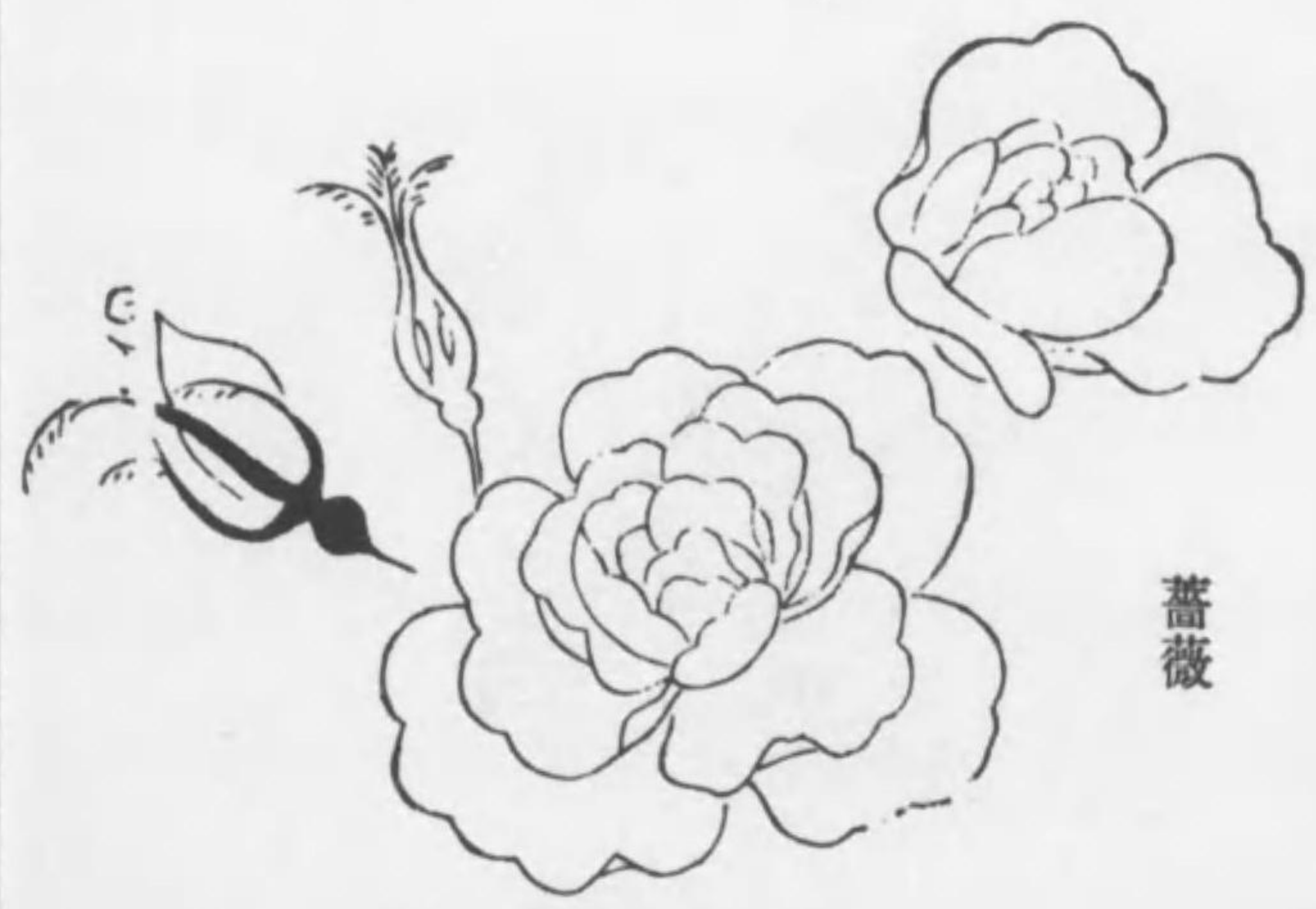
千葉榴花

刺花藤花頭いばら
藤本の花
月季花ばら
長春の花

藤花刺



月季花



薔薇

花頭

野薔薇のばら
凌霄れいそう
のうぜんかずら



野薔薇

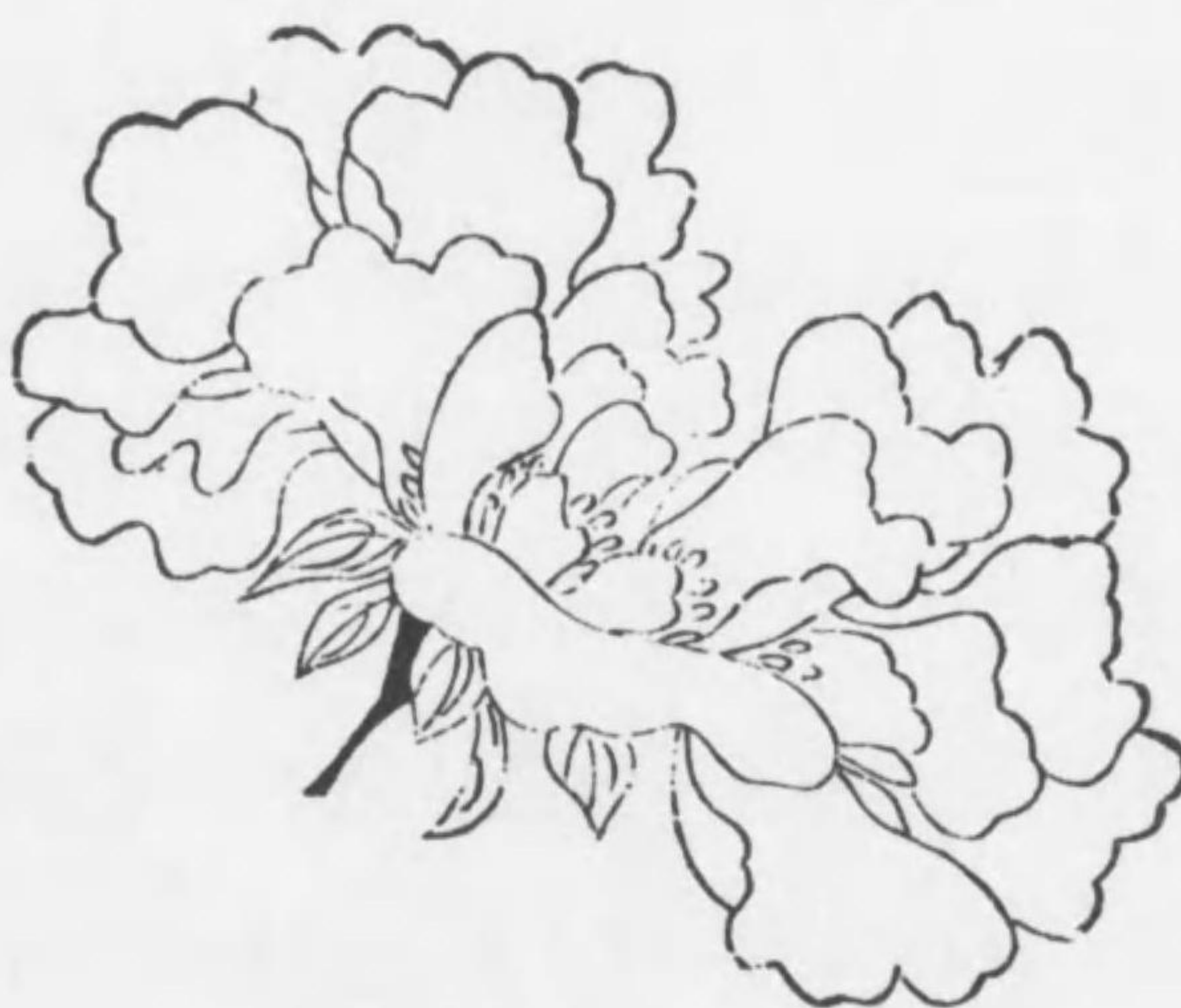


凌霄

牡丹大花頭(ぼたんのだきい
花)
初開側面(半開の花の側面を
るもの)

牡丹大

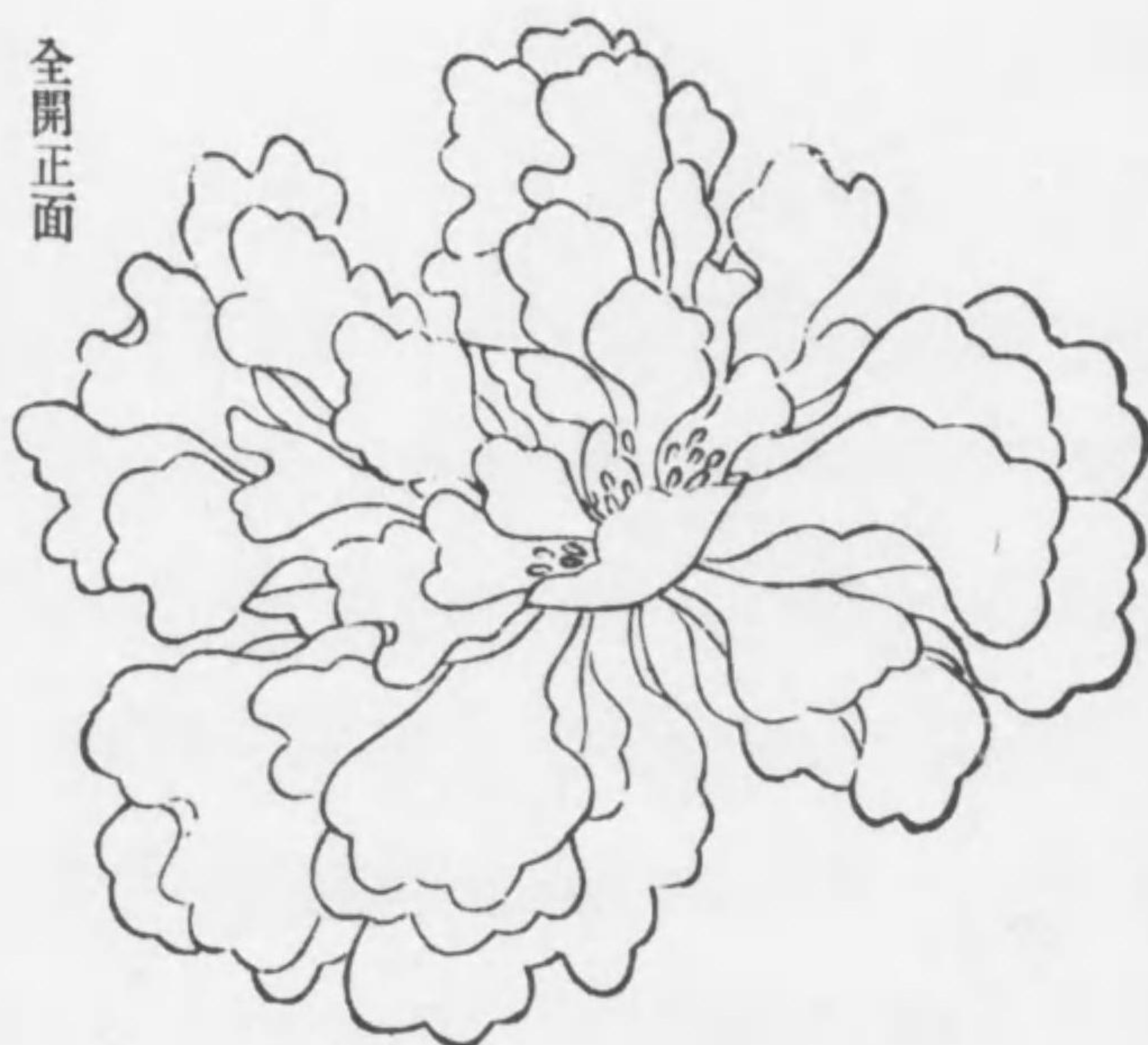
初開側面



全開正面(満開の花の正面を
るもの)
含苞將放(かんぼうしょうはつ
みが開きかけた)

花頭

全開正面



含苞將放



木本各花葉起手式

木本各花葉起手式（木本の各種の花の葉の書き方）
 尖葉長葉（尖りたる葉と長き葉）
 海棠
 石榴

葉尖



石榴

葉長

桃の葉
 梅の葉
 杏の葉
 梅は花を開く時、葉無く、杏は花を開く時、葉は只だ嫩芽（わかめ）のみ。此れを備へて以て綴實の用と爲す。（梅や杏は花を畫くときには葉を書かぬけれども、實を畫くときには葉を書くべきである。實を書き入れるときの爲めにこゝに梅と杏の葉の書き方を示すのである。）



桃葉

杏葉

梅葉

梅開花時
 無葉杏開
 花時葉只
 嫩芽備此
 以爲綴實
 之用

耐寒厚葉(寒さに耐ふる厚き葉)
梔子(くちなし)
山茶(つばき)

耐寒



梔子



山茶

桂葉(かつらの葉)
橙橘(だいご、たちばなの類の葉)

葉厚



桂葉



橙橘



刺花毛葉(いばらある花の毛ある葉)
薔薇(ばら)

花刺

薔薇



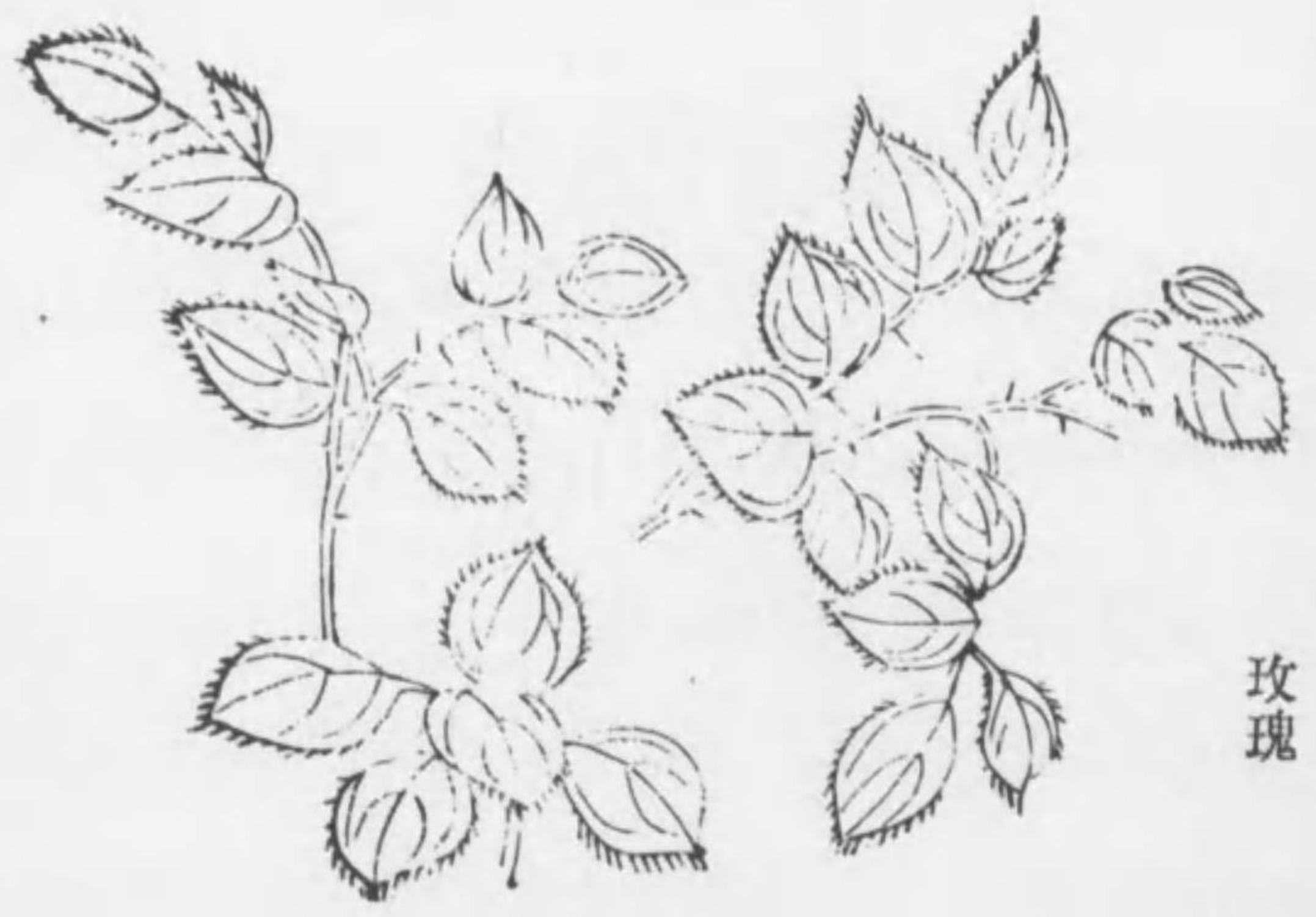
月季(ちやうしゆん)
玫瑰(はまなす)

葉毛

月季



玫瑰



牡丹枝葉(牡丹の切れ込みある葉)
枝梢(えだ、こえだ)
花底(花の下の葉)

牡丹



枝梢

花底

嫩葉(わかき葉)
根下(根もとの葉)

葉岐



嫩葉

根下

木本各花梗起手式

柔枝交加
此枝宜于榴花
紫薇諸細枝



木本各花梗起手式（木本の各種の花の梗の書き方）
柔枝交加（やはらかなる枝の組み合せ）
此枝は榴花（ざくろの花）紫薇（百日紅）諸の細枝に宜し。

薊枝（いばらある枝）

此枝は薔薇・月季の根下（れもと）に宜し。

老枝交加（老いたる枝の組み合せ）

此枝は展長せば桃橘の枝幹を作る可し。（此枝を引き展ばすときは、桃や橘の枝や幹としても宜しい。）

老枝交加
此枝展長可
作桃橘枝幹



薊枝
此枝宜于薔薇
月季根下

臥幹横枝（臥したる幹、横たはりたる枝）
 此枝は老幹の諸花に宜し。
 下垂の折枝（下に垂れたる屈折せる枝）
 此枝は桃・梨・海棠・山茶の諸の老幹に宜し。

臥幹横枝
 此枝宜于
 老幹諸花

下垂折枝
 此枝宜于桃
 梨海棠山茶
 諸老幹



牡丹の根枝（牡丹の根もとと枝）

牡丹根枝



横枝上仰（横たはりたる枝、上に仰ぐ）



横枝上仰

藤枝
此枝は藤本の各花に宜し。
横枝下垂（横たはる枝、下に垂る）
此枝は桃・梨に宜し。



藤枝
此枝宜于
藤本各花

横枝下垂
此枝宜于
桃梨

畫翎毛起手式

畫翎毛起手式（翎毛を畫く
起手式。前の畫翎毛訣を參
照せよ）

翎毛先
畫嘴



眼照上
唇安



留眼安
頭額



接腮寫
背肩



眼は留めて頭額を安んず
眼は上唇に照らして安んず
眼を留めて頭額を安んず
腮に接して背肩を寫す
半環大小の點
破鏡短長の尖
細細に梢出づ

半環大
小點



破鏡短
長尖



細細梢
翎出



徐徐に小尾填む
羽毛は翅脊の後
胸肚は腿腕の前
臨し了りて纒に脚を添ふ
枝を踏み或は展べ或は拳
展む

徐徐小
尾填



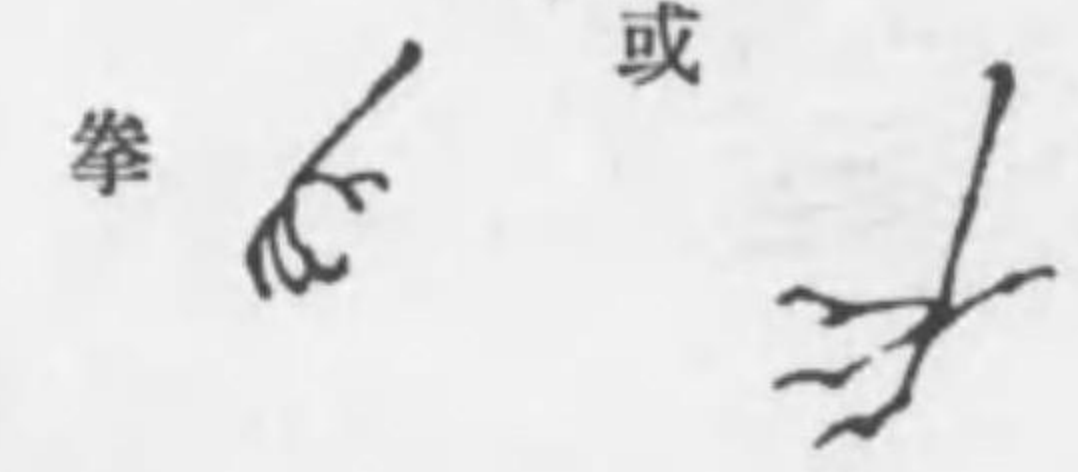
羽毛翅
脊後



胸肚腿
腕前

臨了纒
添脚

踏枝或
展拳



展

踏枝式

踏枝式 (枝を踏む式。枝に
とまつて居る鳥の書きか
た)

正面、下視して足を露はさ
ず。(正面で下を視てゐて足
が見えない)

首を昂げて上視して足を
露はす。(首をあげて上を視
てゐて足が見える)

側面下向(側面を下に向つて
居る)



正面下視
不露足



昂首上視
露足



下側面
向面

平立して頭を回らす
側面上向(側面を上に向つて
居る)



平立
回頭



側面
上向

飛立式

飛立式(飛んで居る鳥と立つて居る鳥の書きかた)
翅を斂めて將に歇まんとす
首を俯して足を捜る

斂翅將歇



俯首搜足



下飛



上飛



舉翅搜翎



下飛(下に向つて飛ぶ)
上飛(上に向つて飛ぶ)
翅を舉げて翎を捜る

並聚式



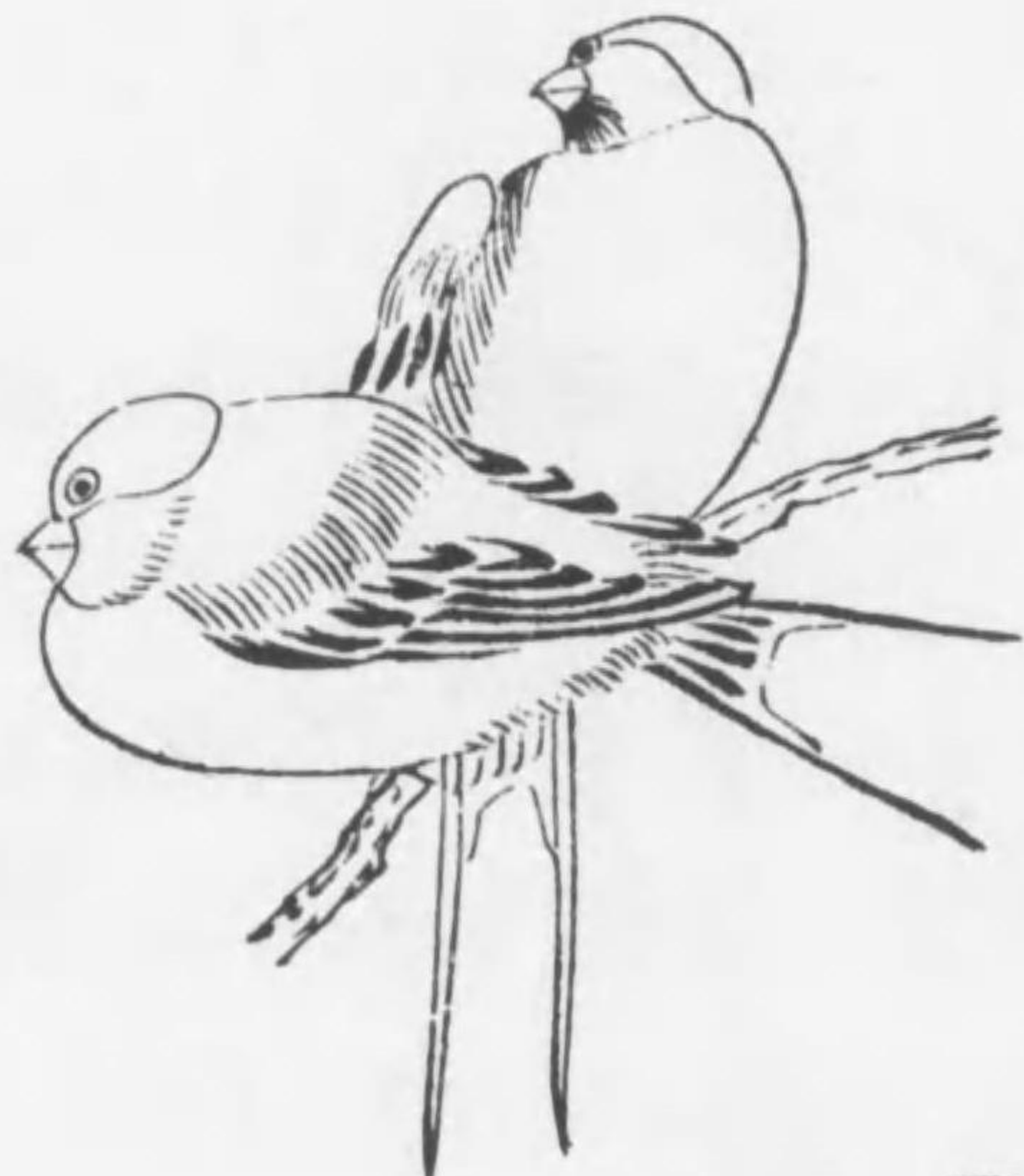
白頭
借老



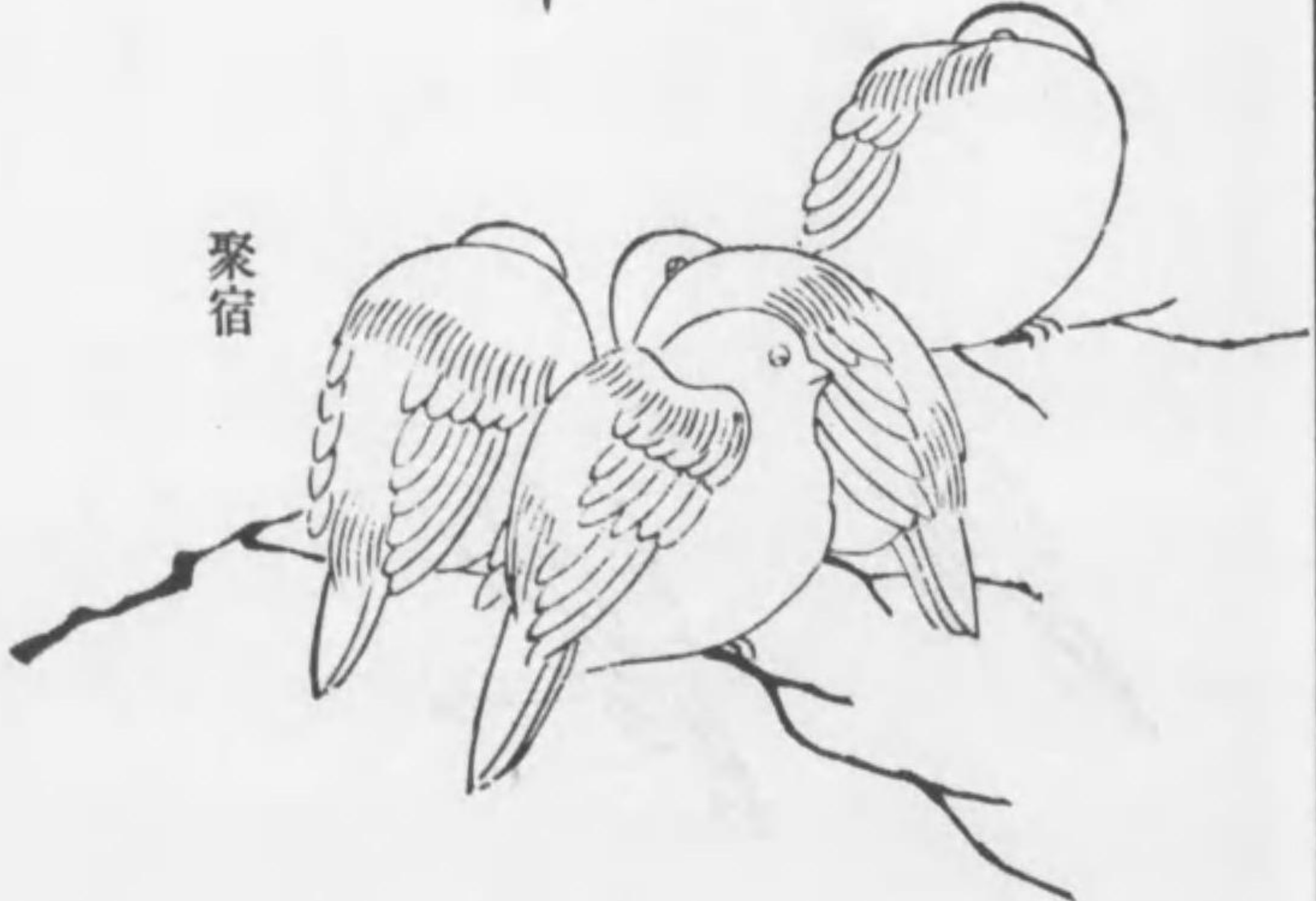
和鳴

並ひ聚まる式
白頭借老はくとうかいらう（白頭は鳥の名、白頭翁。借老は並んで木の上にとまって居るをいふ。白頭の字に因つて借老の字を用ひたのである。）
和鳴（相和して鳴く）

燕爾、栖を同じくす（二羽の燕が同じ木にとまって居る）
聚宿（數羽の鳥が聚まって宿て居る）



燕爾
同栖



聚宿

水禽式

水禽式

海鶴(海のほとりの鶴)

溪鶯(溪谷の鶯)

山禽は尾長く、水禽は尾短し。前の式には山禽多し。故に此には尚ほ水禽を以てす。其の未だ盡さざる者は、類に解れて、劣く之を求む可し。



海鶴



溪鶯

山禽尾長水禽尾短
前式多山禽故此端

以水禽其未盡者可
觸類旁求之

汀雁(みぎはの雁)
沙鳧(沙上の鳧)



汀雁



沙鳧

細鈎翎毛起手式

細鈎翎毛起手式 (細き線を以て畫く鳥の書き方)

初に嘴を畫き、眼を添ふ頭を畫く

肩・脊・半翅を畫く

枝を踏む足

爪を展ばせる足



初畫嘴添眼



畫頭



畫肩脊半翅



踏枝足



展爪足

爪を拳めたる足
全翅を畫く
肚を畫き、尾と足とを添へ、全身、枝を踏む

畫全翅



畫肚添尾
足全身踏
枝



拳爪足

翻身飛鬪式

翻身飛鬪式（身を翻したる鳥、飛んで鬪ふ鳥を畫く法式）

身を翻して倒に垂る

鳥の枝を踏むを畫くは、籠の中の者に異なり、宜しく生動して、起たと欲するの勢有り、轉側偃仰を具ふべし。故に定まれる形無し。而して多くは正しく立つて上に向ふ。此れは則ち身を翻して倒に垂れ、下らんと欲するの勢有り、更に生動するを覺ゆ。

（木の枝にとまつて居る鳥を畫くことは、籠の中に倒はれて居る者と異なつて、生動して、飛び上らうとする勢があり、ひつくりかへつたり、横をむいたり、下を向いたり、上を向いたりする姿を具備すべきである。故に一定したる形は無い。そして多くは正しく立つて上に向いて居る鬪であるが、これは身を翻して倒に垂れて居て、飛んで下らうとする勢があり、一層生動するやうに思はれる。）



翻身倒垂
畫鳥之踏枝異于籠中者宜生動有欲起之勢具轉側偃仰故無定形而多止立向上此則翻身倒垂有欲下之勢更覺生動

二雀飛び鬪ふ

兩鳥飛び鬪ふを畫くは、法を得ること最も難し、具に奮つて身を顧みざるの勢有り。其の争ひ飛ぶこと迅速にして、身を翻し頸を鈎むるは、須く其神情を得べし。未だ形と理とを以て之を求む可からざるなり。（二羽の鳥が飛びながら鬪つて居る状態を畫くことは、其法を得ること最もむづかしい。奮つて身を顧みない勢をそなへねばならぬ。其の争うて飛ぶことは迅速であり身をひるがへし頸をかがめるところなど、其神情を得るを要する。形式と理窟とでそれを求めることは出来ない。）

雀飛鬪
畫兩鳥飛鬪得法最難具有奮不顧身之勢其争飛迅速翻身鈎頸須得其神情未可以形與理求之也



浴波式 (水をあびて居る鳥を畫く法式)

開鳥と浴鳥とは、枝を踏む者を畫くに較ぶれば、其情勢更に生動せんことを要す。開鳥は、身を翻し頭を釣む。須く奮つて身を頭みざるべし。浴鳥は則ち羽を浮べて波を拂ふ。須く悠然として自得すべし。又各々同じからざる處有り。(開つて居る鳥と水を拂びて居る鳥とを畫くには、杖にとまつて居る者を畫くに較べると、其情勢が一層生動することを要する。開つて居る鳥は、身をひるがへし頭をかがめて居る。奮つて身を頭みない勢があるべきである。水をあびて居る鳥は、水面に羽を浮べて波を拂つて居る。ゆつたりとして自得して居る態をあらはすべきである。又、各々同じくない處がある。)

浴波式

開鳥與浴鳥較畫踏
枝者其情勢更要生
動開鳥翻身鈎頭須
奮不顧身浴鳥則浮
羽拂波須悠然自得
又各有不同處



浮羽
拂波

翅を垂れて浴せんと待す

垂翅
待浴



301
40

全藤子園畫傳

第十二册 毛花弁繪 (上)

昭和十年十一月十五日印刷
昭和十年十一月二十日發行

預約會費
壹圓參拾錢

編者 小杉放庵
公田連太郎

發行人 北原義雄
東京市牛込區喜久井町三丁目一九五

印刷所 美術印刷株式會社
東京市牛込區西五軒町三丁目

製本所 福山印刷製本所
東京市牛込區西五軒町三丁目

發賣所 福山書店
電話牛込四三六〇

發行所

アトリエ社

東京市牛込區喜久井町三丁目
電話牛込六四二二番
總發東京六六〇〇二番

301
40

終

